

○扇どものなかに
(かきたる扇の)

九十四段

御めのとの大夫の命婦ひうがへくだるに給はする扇ど
ものなかにかたつかたは日いとらゝかにさしたるお
なかの館などおほくして今かたつかたは京のさるべき
所にて雨いみじうふりたるに

あかねさす日にむかひてもおもひいでよ都ははれぬ
ながめすらんと御手にてかゝせ給ひしあはれなりきさ
る君をおき奉りてとほくこそえいくまじけれ

○御めのとの大夫の命婦 詞花集に此あかねさすの御歌をのせ其詞
書につねに侍ける女ばうのひうがの國へ云々○あかねさす云々 春
曙抄に日に向ひてもといふに日向をよみ給へりながめは長雨をそへ
てなり廣道の説にすべしながめは物を永くみつむるをいひて大かた
物思ひのある時に空をみる事などにいへりたゞうちみるのみのこと

にはあらず○さる君を云々 さまでおぼしめす君を心づよくふりす
てて去るべきにあらずさるをかくふりすてて去るはいかにぞとなり
えの字心とめてみるべし

九十五段

ねたきもの これよりやるも人のいひたるかへしもか
きてやりつる後に文字ひとつふたつおもひなほしたる
とみの物ぬふにぬひはてつとおもひて針をひきぬきた
ればはやりしりをむすばざりけり又かへさまにぬひた
るもいとねたし

○これよりやるも云々 歌にても文にてもかくあるべし○とみの物
いそぎて作るべき物なり

南のゐんにおはします比西の對に殿のおはしますかた
に宮もおはしますせば寢殿にあつまりゐてさうくしけ

○南のゐんに(宮
の)おはします比
(その)

○とみ一早

○ゆだけ一行長

○誰か(おのれ)
○わひたらん人の
表表をみ定めて
げに(あやまちて
けり)と(て)なほ
さめ(これに)無紋
の御ぞなれば(表

れば、たはぶれあそびをし、渡殿にあつまりるなどしてあ
るに、これ只今とみの物なり。誰もくあつまりて、時かは
さずぬひてまゐらせよ」とて、給はせられたれば、南面にあつま
りゐて、御ぞ片身づつ誰かとくぬひいづるといどみつゝ、
ちかくもむかはすぬふさまも、いと物ぐるほし命婦のめ
のといととくぬひはてて、うちおきつるゆだけのかたの
御身をぬひつるが、そむきさまなるをみつけで、とぢめも
ああへず、まどひおきてたちぬるに、御背あはする人はや
うたがひたり」とて、わらひのゝじりて、これぬひなほせと
いふを、^{ミヤツブノメント}誰かあしうぬひたりとしりてかなほさん。あやな
どならばこそぬひたらん人の、げにとなほさめ。無紋の御
ぞなれば、なにをしるしにてかなほさん。まだぬひ給はさ

表しみにくけれ
ば)なにをしるし
にてか(わが)あや
まちとしりて)

○(主上の御方へ)
のほらせ給はん

らん人にぬひなほさせ給へ」とて、きゝもいれねば「さいひ
てあらんや」とて、源少納言、新中納言などいふ人たちの物
うげにとりよせて、ぬひなほし給ひしを、みやりてゐたり
しこそをかしかりしか。これはよさりのほらせ給はん」と
て、とくぬひたらん人をおもふ」とおほせられしかばとぞ。

○みづ一瑞

○南のゐん 二百五十六段に「南のゐんの北おもてに、さしのぞきたれ
ば云々」とあるを抄に「道隆公御殿也、其邊に積善寺を立給ふと也云々」と
いへり。又道隆公の南院にて薨じ給ひし由、公卿補任并に日本紀略にも
みえたり。されば此南院は拾芥抄、二中曆にみえたるとは同じからず。○
宮もおはしませば 前のおはしますは、住ませ給ふ意なれど、これは暫
く行啓ありし也。○これ只今云々」とみの物なり「只今」とうちかへして
みるべし。○時かはさす 時を過ぎすと也。○命婦のめのと 未詳○ゆ
だけ 後拾遺神祇に「あめのしたはぐくむ神のみそなれば、ゆだけにぞ
たつみづのひろ前とあり、是によれば、衣のたちかたなる事明か也。美隆

の説に「此草紙十二十二三〇二」の詞をもて考合するに、此頃男も女も衣の片方を行長ひろくして、着る事の流行しにや。さらばこゝも其行長の廣き方の御身をいふ事也とあり。口三〇二〇御せあはする人 御衣を分擔してぬひたれば、片身つつぬひをへたるを、今は御背を合する也。○そむきさま 裏表をとりたがへてかくは縫ひたる也。○誰かあしう云々 かゝる結果をみるに至りしは、自分の過か他人の過か、いづれの過ちなりしか知りたければ、其責を負ひがたしと也。○なにをしるしにてか 裏表のみにくきものなれば、畢竟自分の縫ひたがへといふ證據なしと也。○まだ縫ひ給はざらん云々 おのれ縫ひなほすべき理山なければ、寧まだぬはぬ人に縫ひなほさせ給へと也。○さいひて云々 さやうに無法なる事をいひてやむべきにあらずと也。○源中納言新中納言 未詳。○おもふ 眷顧し給ふ意也。

みすまじき人に、外へやりたる文とりたがへてもてゆきたるねたし^レげにあやまちてげり^レとはいはで、口かたうあらかひたる、人めをだにおもはずば、はしりもうちつべし。

○長櫃一ナガビツ

おもしろき蕨薄などをうゑてみる程に、長櫃もたるもの、鋤などひきさげて、たゞほりにほりていぬることわびしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをりは、さもせぬものを、いみじうせいすれど、たゞすこしなどいひていぬる、いふがひなくねたし。受領などの家に、さるべき所の下部などのきて、なめげに物いひ、さりとしてわれをばいかせん。とおもひたるけはひにいひいでたる、いとねたげなり。みすまじき人の文をひきとりて、庭におりてみたてる、いとわびしうねたく、おひてゆけど、すのもとにとまりてみるこそとびもいでぬべき心地すれ。

○なめげ一無禮

○口かたうあらかひたる 自分に過失なき由いひて屈せぬ也。○長櫃 草花をいれて送る事あり。明月記嘉祿二年九月一日の條に「宗雲僧都送長櫃、請前裁送之」○よろしき人云々 此人は男也。宸翰本に「よろしき

を。と。こ。などのあるをりは、さもせぬものを、女。ど。ち。は。い。み。じ。う。い。へ。ど。と
 あり。されば男だにあらば、さまでの人ならずとも、意なるべし。○さり
 とてわれを云々。主人の威勢をかりたるさま也。○みすまじき人云々
 宸翰本に、又しのびたる人の文も、ひきそばみてみる程にうしろより、
 人のはかにひきとられたる心ちいとわびし。庭にはしりなどしぬる
 を、おひていけど、我はすの許にとまりぬれば、したりがほにひきあけて
 みたてるを、うちにてみる。こそいかにせんとねたくとびいでぬべき心
 地すれ。○普通本にはこの次に、すゝなる事云々の一條あり。こゝにあ
 るべきにあらず。古本宸翰本に従ひて省きつた。し古本宸翰本には、む
 とくなるもの(二二〇)の内に、これに似たる一條あれど、その段は普通本
 にてよろしければ、その條はとらず。

九十六段

かたはらいたきもの まらうどなどにあひて、物いふに、
 奥のかたにうちとけごと、人のいふをせいせできく心地。

○何ばかりの人なられど(かたはらいたし)

○(かた)のいひける
 ○さそい

おもふ人のいたくゑひて、おなじことしたるきゝゝゝたる
 をもしろで、人のうへいひたる。それは何ばかりの人なら
 ねど。つかふ人などだにかたはらいたし。旅だちたること
 ろにて、げすども。されかはしたる。にくげなるちごをお
 のれが心地に、かなしとおもふまゝに、うつくしみあそば
 し、これが聲のまねにて、いひけることなどかたりたる。さ
 えある人の前にて、さえなき人の物おほえがほに、人の名
 などいひたる。ことによしともおほえぬわが歌を、人にか
 たりきかせて、人のほめし事などいふも、かたはらいたし。
 人のおきて物語などするかたはらに、あさましううちと
 けてねたる人、まだ音もひきとゝのへぬ琴を、心ひとつや
 りて、さやうのかたしりつる人の前にてひく。

○かたはらいたき 鈴屋翁の説に、傍痛にて、かたはらよりみきゝて、痛く思ふ意なり。俗言に笑止なるといふにあたり。○せいせいで 客に憚りて、制止せられぬ也。古本に「えはせいせいで」○何ばかりの人ならねど、身分賤しき人などをいふ。○旅だちたる所云々 旅館などは程せまければ、下部などのある所と近ければ也。○かなし 愛憐の意也。○これが聲 ちこの也。○人の名 春曙抄に「古人の名也」○ことによしともおぼえぬ 聞く人が也。○心ひとつやりて 「さやうのかた云々」といふ詞をへだてて「ひく」といふ詞につけてみるべし。○此段の終に 諸本いどしう云々の一件あれど、二百四十八段と重複すれば古本に従ひて省きつ。二百四十八段はもとこのつゞきなりしが錯簡したるにや。

九十七段

あさましきもの さしぐしみかくほどに、物にさはりてをりたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせくやあらんとおもひしに、只夢の心地してあさ

○おほのこゝ程

○てうばみ 調半
○とら 疾

○のりゆみ 賄弓

ましうあへなし。人のためにはづかしき事、つゝみもなくちごもおとなもいひたる。かならず來なんとおもふ人をまぢあかして、曉がたに只いさゝかわすれてねいりたるに、鳥のいとちかくかうとなくに、うちみあげたれば、晝になりたる、いとあさまし。てうばみにとうとられたる。むげにしらずみずきかぬ事を、人のさしむかひてあらかはすべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。のりゆみにわなゝくゝひさしうありて、はづしたる矢のもてはなれて、ことかたへゆきたる。

○あさましきもの 縣居翁の説に「思の外なる事の甚しきを云故に多く驚きたるさまにきこゆ」○おほのか おほどかに同じ。宇治拾遺一に「あさましうおほのかにもいふものかなとまゝてねいりぬ」○ところせく云々 さるおほのかなるものなれば、廣き道にても、ところせく、物に

さへへられて、俄にくつがへらぬものと思ひたりしとなり。○あへなし。センカタナシとなり。○とうとられたる。とうはとくの音便なり。いまだ多く手も下さるるにとく敵手に取られたるなり。さるは宸翰本にてうばみうつに、上手めきて、てはたてたるが、かけられて、そのほどにてうともうちしきりて、やがて皆かけとられぬるとあるにてもしるべし。舊説わろし。○あらかはすべくもなく。否、さる事なしと争ふ事も出来ぬやうにとなり。○のりゆみ。江次第に、賭弓(正月十八日)以射禮後朝被行云々公事根源に、是は天子弓場殿にのぞみて、弓を御覽するなり。仲春に弓をみる事は、禮記などにも侍るにやなどあり。此賭弓は、勝の方はまけの方に、爵酒を行ふとぞ。○わななくく。宸翰本に此上に「いみじうねんする人の」の十字あり。

九十八段

くちをしきもの。五せち、御佛名に雪ふらで、雨のかきくらしふりたる。さるべき節會などの御物忌にあたりたる。

いとなみ一巻

いとなみいつしかとおもひたる事の、さはる事いできて、にはかにとまりたる。いみじうほしうする人の子うまで、年ごろすぐる。あそびもしはみすべき事ありて、かならずきなんとおもひて、よびにやりつる人の、さはる事ありて、などいひてこぬ、くちをし。男も女も、宮仕所よりおなじやうなる人もるとともに、寺へも、まうで、物へもゆくに、このもしうこほれいでて、よういははげしからず、あまりみぐるしともみつべくはあらぬに、さるべき人の馬にても、車にても、ゆきあひたるはよし。みずなりぬる、いとくちをし。わびては、すきくしきげすなどの、人などにかたりつべからんを、がなとおもふも、けしからぬなめりかし。

○御物忌云々。天皇の御物忌の時は、出御なき故、くちをしきなり。禁秘

○(みすべき人なきに)わびては
○げすなどの(わが)ありませを

御抄に「御物忌之時、惣不出御他殿舎中、諸事於藤中有之云々」○いとなみ
嬰應にても、何にても用意してなり。○このもしう 衣の車よりいで
たるさまがこのもしうなり。○はげしからず ゆきとどきすきたるに
はあらぬをいふ。○をがな 願望のがななり。□一二八、二五一

九十九段

○さうじー精進
○ふたまー二間
○日ごと(郭公)
○ひぐらしー堀

五月の御さうじのほど、しきにおはしますすに、塗籠の前の
ふたまなる所を、ことにしつらひしたれば、れいさまなら
ぬもをか。朔日より雨がちにて、くもりくらすつれ
なるを、郭公の聲たづねありかばやといふをきゝて、われ
もくといでたつ。かもの輿になにがしとかや、七夕のわ
たる橋にはあらで、にくき名ぞきこえし。そのわたりにな
ん日ごとになくと人のいへば、それはひぐらしな」と

○さみだれ(し)は
○(車を)いれさせ

○おなじくは(ゆ
きてきかばや)
○いま(し)ばしま
て)
○うまばー馬場

いふ人もあり。そこへとて五日のあした、宮づかさ、車の
事いひて、北の陣より、さみだれはとがなきものぞとて、い
れさせて、四人ばかりぞのりてゆく。うらやましがりて、今
ひとつして、おなじくは「などいへど、いまなどおほせらる
れば、きゝもいれず、なさせなきさまにてゆくに、うまばと
いふ所にて、人おほくさわぐ。何事するぞ」とへば、てつが
ひにて、まゆみいるなり。若ばし御覽じておはしませとて、
車とめたり。左近の中少將みなつきたまふといへど、さ
る人もみえず。六位などのたちさまよへば、ゆかしからぬ
事ぞ。はやくすぎよとて、ゆきもてゆけば、道も祭の比おも
ひいでられてをか。

○五月の御さうじ 藤中抄に「齋月(年三長齋ともいふ)正月、五月、九月、こ

○納戸ナンド

の月は帝釋の南閻浮提にむかひて衆生の善惡をかんがへしるす月也。五種の味をたもち戒をたもち佛菩薩を詣禮すれば一切の罪業消滅して災難おこらず命終ののち十方の淨土に往生すといへり云々○しき職御曹司也。○塗籠 梅窓秘記に「塗籠ト云モノヲヤ、モスレバ、土蔵ノ」ニ思フ人アレド、シカラズ、塗籠ハ今ノ俗ノ納戸ト云、所ト同ジ物ニテ、寢殿ノ中ニアルモノナリ。空穂物語藏開ノ上に野中のやうにて、人の家もみえず、さる所にむかしのしんでんひとつめぐりあらはにて、ぬりごめのかぎりみゆ。又西北のすみにおほきにかめしきくらありト云、ニ分明也。○ふたま これは職御曹司にしつらはせ給へるにて、清涼殿のとは別なり。廣道の源氏餘釋に、一翁の説を引きて「二間はよろしききは家には、必しつらふ事なり。宅神を祭り、或は佛像をもかけなどする爲の間にて、別に清まはりて物するなり云々、但し平常に設置くにはあらず、齋會などある時にのぞみての鋪設なり云々」とあり。これも同じ。○にくき名 抄に「賀茂の奥に鵠川といふ所有」にや。古歌に「鵠の川風立ぬ七夕の紅葉とばかり波やかくらんとよめるは、もし此所の事にや云々」又

○あきのぶー明順

「又片岡社の邊に浮橋と云、所有云々」○車の事いひて 車の用意せよといひてなり。○北の陣 △一〇〇さみだれは云々 常に許されぬと、さみだれのほどなればとがなしとなり。雜式に「凡乗轝車出入内裏者、妃限曹司、夫人及内親王、限温明、後涼殿、後命婦三位、限兵營陣、但續、女御、及孫王、大臣、嫡妻、乘輦、限兵衛陣」とあるを併考ふれば、北の陣よりは、女房どもの乗車は許されぬにや。○いへどいま 別本に「いふをまとあり。○きゝもいれず 前の今ひとつして云々」といふを、少納言がきゝいれぬなり。いへど「よりつゞけてみるべし。○なさけなき 他の女房を同道せぬをいふ。○うまば 左近馬場なるべし。さるは賀茂へゆく道筋なればなり。○てつがひ 高尚の説に「荒手番眞手番と云名を思ふべし。のり手射手をつがひこゝろむる心にて、俗語にあらこゝろみ本こゝろみと云が如し」とあり。江次第三に「射禮之前行之」とある是なり。公事根源によれば、五日は左近の眞手結なり。○左近の中少將云々 抄は「列坐について次第する事など有を云なり。○祭の比 加茂祭の頃通りしゆるなり。」

かういく所に、あきのぶの朝臣の家あり。そこもやがてみ

○さうじ一障子

んといひて、車よせておりぬ。おなかだち事そぎて、馬のかたかきたるさうじ、あじろ屏風、みくりのすだれなど、殊更に昔の事をうつしいでたり。屋のさまも、はかなだちて、はしちかくあさはかなれど、をかしきに、げにぞかしがましとおもふばかりなきあひたる。郭公の聲を、くちをしう御前にきこしめさせず、さばかりしたひつる人々にも「などおもふ。所につけては、かゝる事をなんみるべき」とて、いねといふ物おほくとりいでて、わかきげすどものきたなげならぬ、そのわたりの家のむすめなどひきゐてきて、五人してこかせ、みもしらぬくるべきもの、二人してひかせて、歌うたはせなどするを、めづらしくてわらふに、郭公の歌よまんとしつる、まぎれぬ。からゑにかきたるかけばん

○この郭公の聲を人々にも(きかせず)

○きたなげならぬ(又)

○よまんとしつる(し)

○かけばん一懸盤

などして物くはせたるを、みいる、人なければ、家のあるじ、いとわろくひなびたり。かゝる所にきぬる人は、ようせずば、あるじに、げぬばかりなどせめいだしてこそまゐるべけれ。むげにかくては、その人ならずなどいひてとりはやし、この下わらびはてづからつみつる「などいへど、いかで女官などのやうにつきなみてはあらん」などいへば、とりおろして、例のはひぶしに、ならはせ給へるおまへだちなれば、とて、とりおろしまかなひさわぐほどに、雨ふりぬべし」といへば、いそぎて車にのるに、さてこの歌はこゝにてこそよませ給はめといへど、さばれ道にても「などいひて、みな、のりぬ。」

○とりおろして(かゝるむね)

○あきのぶ 高階氏の系圖によれば、明順は成忠の三男にて、從四位上

左中辨東宮學士なり。○事をきて 調度などそなはらぬをいふ。○あじろの屏風 河海抄に「普通の網代にて、張りたる屏風なり」とある是なり。○みくりのすたれ 士清の説に「今伏見にて、うきやがらといへり。歌にみくりなはどよめるは、繩なるべし。袖中抄に「遍照寺の母屋のみすは、みくりのつると申物にて侍るは、此物なるにや」△四二〇したひつる人 前の「今ひとつして云々」といひし女房達をいふ。○きたなげならぬ 頭書に此下に又の字をそへたるは、美隆の説による。○こかせ 抄に「いにしへは、刈し稻を束ね置て、要用にしたがひて扱接てつかふとなり。されば今の稻こくとは去年の稻を扱接などするとなり」とあり。五月に稻こくは去年のなればなり。○くるべきもの 和名抄に「反轉を久流閑扱とよめるを、士清の説に「糸をくりてへる具なれば名けり」といへり。くるべきははやく萬葉に名詞として使ひたれど、田舎しらぬ女房故ふと忘れたるか、さらすばわざとしらぬさまにかさいでたるか。○みいる人なければ 懸盤に向ひてくふものなき也。○ひなびたり 旁註に「あきのぶのひげなり」とあり。さるは前に田舎のあやしきを叙し、次に「かゝ

○扱接—コキニリ

○ひげ—卑下

る所といふにても明かなり。○むげにかくては 抄に少しも聞しめさでは、かやうの所へ來り給ふ人々とはおぼえぬとなり。○いかで女官云云 春曙抄に「女官などの臺盤につきならびて、くふやうには、いかでかあらんとなり。行儀うるはしくはえくふまじきとなり」

うの花のいみじくさきたるををりて、車の簾かたはらな
 どにさしあまりて、おそひむねなどにながき枝をふきた
 るやうにさしたれば、たゞうの花がさねを、こしにかけた
 るやうにぞみえける。供なるをのこどももいみじうわら
 ひつゝ、「こゝまだしく」とさしあへり。人もあはなんとお
 もふに、さらにあやしき法師あやしのいふかひなきもの
 のみたまさかにみゆる。いとくちをし。ちかうきぬれば、さ
 りともいとかうてやまんやは。この車のさまをだに、人に
 かたらせてこそやまめとて、一條殿のもとにとめて侍

○むね—棟
○こし—輿

○へしきのみぎうしに—ちかうきぬれば

○とめて—使し

○いひいたれば
(使へり来て)
 ○しは「まぢ給へ」
 ○なん(侍従は)の
給へる
 ○まひろげ一間擴

從殿やおはします。郭公の聲きいて、今なんかへり侍るといひいたれば、「只今まゐる。しばしあが君」となんの給へる。さぶらひにまひろげておはしつる。いそぎたちて、奴袴たてまつりつ」といふに、まつべきにもあらずとてはしらせて土御門さまへやらするに、いつのまにか、裝束しつらん。帯は道のまゝにゆひて侍従しばしくとおはする供に侍雑色三人ばかり、ものもはかではしるめり侍とくやれ」といとゞいそがして、土御門にきつきぬるにぞ、あへぎまどひておはして、まづこの車のさまを、いみじくわらひ給ふ侍従へに、人ののりたるとなんさらにみえぬ。猶おりてみよ「などわらひ給へば、供なりつる人どもも興じわらふ。」侍従歌はいかにか。それきかん」とのたまへば、侍今御前に御覽せさせて

○あへぎ一囁

○いざ(來)給へか
 ○冠袍などをとりにやり給へ
 ○(車を土御門に)たひきにひきいれつ

のちにこそなどいふ程に、雨まことにふりぬ侍従などかこと御門のやうにあらで、この土御門しもかうへもなくし。そめけんとけふこそいとにくけれなどいひて侍従いかでかへらんとすらん。こなたさまはたゞおくれじとおもひつるに、人目もしらずはしられつるを、あゝいかんこそいとすさまじけれ」とのたまへば、侍いざ給へかしうちへ」といふ。侍従「烏帽子にてはいかに」とあれば、とりやり給へなどいふに、雨まめやかにふれば、笠なきをのこどももたゞひきにひきいれつ。一條殿より笠もてきたるをさゝせて、うちみかへりくこのたびはゆるくと、ものかげにてうの花ばかりをとりておはするもをかし。

○おそひ 車をおほふものなり百四十六段にむしろばりの車のおそ

ひとあるを、春曙抄に「筵をおほひたる車なるべし」と解けり。○むね 車の屋の上に、前後にわたりたるものなり。蛙抄「柵車の條に、棟表袖表、左右各覆「柵」○まだしく」旁註に「この所に、まだ卯花のさしたらぬとなり」○人もあはなん 拾遺春に「ちりちらすきかまほしきを故郷の花みて歸る人もあはなん」○一條殿 この文意によれば、爲光公の家なり。△一九〇侍從殿 公信爲光公の六男なり。○さくらひ △五五〇まひろげ 三百十五段に「心とめてかくまひろげすがたをかしうみゆ」とあるを、抄に「衣などの妻すその、打ひらきてかきをさめぬさまを云なり」とあり。空穂藏開二上十四に「さしぬきなほしなどを引さげ、まひろげていできたり」とあるも同じ。○道のまゝ 道をゆくまゝになり。○土御門につき 雜式に「凡乗車出入宮城門者、妃以下、大臣嫡妻已上、限宮門外四位已下及内侍者聽出入土門、但不得至陣下」○この車のさま 抄に「卯花かさしたる車なれば、一條殿興じ給ふ義なり」○今御前に御覽せさせて云々 下文によれば、少納言遂に歌よまされど、此時は御前にいづるまでによみいでん心構にて、かくはいひしなるべし。○うへもなく 屋

○(宮の御前に)まゐりたれば
○(よ)一怨
○はしりつる(を)

根のなきなり。源氏末摘花に「むかひたる廊のうへはなくあはれなれば」○けふこそ云々 常には何とも思はざりしかど、今日は雨ふればにくしとおもふなり。○たゞおくれじ云々 旁註に「追つかんと思ふばかりにて、人目もかまはず走り來るとなり」○あゝいかんこそ あゝは疑の辭なり。源氏若菜に「まうくくにみゝもおほおほしかりければ、あゝとかたぶきてゐたりとあるに同じ。こゝは折角走せたるを、引返さんかくちをしければ、かくいへるなり。○烏帽子にてはいかに 烏帽子は襲の時きるものなれば、これをきて御前にいでんはいかにと也。參照 桃華葉葉 ○まめやかに こゝは頻になり。源氏幻に「雪いたうふりて、まめやかにつもりにけり」とあるを、鈴屋翁の説に「かつ消などもせず、ひたくとおほくつもるをいふなるべし」といへるを併せ考ふべし。

さてまゐりたれば、ありさまなどとはせ給ふ。うらみつる人々ゑじ心うがりながら、藤侍從の一條の大路はしりつる。かたるにぞ皆わらひぬる。さていづら歌はととはせ給

○さしき一儀式
○歌なくてはいふかひなし

ふかうく」と啓すればくちをし宮の事やうへ人などのき
かんにいかでかをかしきことなくてあらんそのきつ
らん所にてふとこそよまましかあまりぎしきさだめつ
らんぞあやしきやこゝにてもよめいふかひなしなどの
たまはすればげにとおもふにいとわびしきをいひあは
せなどする程に藤侍従侍従のありつるうの花につけてうの
花のうすやうに

郭公侍従なくねたづねに君ゆくときかば心をそへもして
まし清かへしまつらんなど局へ硯とり宮にやれば只これし
てとくいへとて御硯のふたに紙などいれて給はせたれ
ば宰相清の君かき給へといふを猶宰相そこになどいふ程にか
きくらし雨ふりてかみもおどろくしうなりたれば物

○えたらん人こそ
○返事は
○すくせ一宿世
○くんじ一風

もおほえず只おそろしきに御格子まありわたしまどひ
し程にこのこともわすれぬいとひさしくなりてすこし
やむ程にくらくなりぬ只今猶この御返事奉らんとてと
りかゝるほどに人々上達部などかみの事申しにまあり
給ひつれば西面にいでて物などきこゆる程にまぎれぬ
人はたさしてえたらん人こそせめとてやみぬおほかた
この事にすくせなき日なめりとくんじて今はいかでさ
なんいきたりしとだに人にきかせじなどぞわらふを今
もなかそのいきたりしかぎりの人どもにていはざら
んされどもさせじとおもふにこそあらめと物しげにお
ほしめしたるもいとをかしされど今はすさまじくなり
て侍るなりと申すすさまじかるべき事かはなどのたま

はせしかど。さてやみにき。

○うらみつる人々 前の「今ひとつして云々」といひし女房達をいふ。○かたるにぞ 少納言が也。○うへ人 殿上人也。○そのきつらん所 郭公の聲きし其所と也。○さしきさだめ おもくしく考へて、よまんとするをかくはの給ふなり。○いひあはせ 少納言が此歌いかすべきなど、同行せし人にいひあはするなり。○ありつるうの花 前に侍従が物かげにて取りしなり。○心をそへ 同行はせずとも、せめて心をそへてやるべかりしとなり。○宰相の君 同行中の一人にや。○まゐりわたし こゝはおろすなり。○このこと 歌の事なり。○かみの事申しに かく天變ありければ、御見舞に参内し給ふとなり。○人はた 此人は女房達なり。○さしてえたらん人 かの歌は侍従より少納言にさして贈りたれば、さしてえたる人とは少納言をいふ。○すくせ 宿世の因縁なり。こゝは只縁なしといふ意なり。○いはざらん 歌をよむ事なり。○おもふにこそ 少納言がなり。

二日ばかりありて、その日の事などいひいづるに、宰相の

君いかにぞ。てづからをりたり。といひし下わらびは「どのたまふをきかせ給ひて」おもひいづる事のさまよ」とわらはせ給ひて、紙のちりたるに、

下わらびこそこひしかりけれ」とかゝせ給ひて「もといへ」とおほせらるゝもをかし。

郭公たづねてきし聲よりもとかきてまゐらせたれば、いみじううけたまはりたりや。かりまでだにいかで郭公の事をかけつらんとわらはせ給ふ。この歌よみ侍らじとなんおもひ侍るものを物のをりなど、人のよみ侍るにも、よめなどおほせられ、えさふらふまじき心地なんし侍る。いかでかはもじの數もしらず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅をば、菊などよむやうは侍らん。されど歌

○おもひ侍るものをいかに侍る事な申しつらん

○これこそ(めでた)は
○子なれば(う)ば
かりはよみぬへし

○さいそー最初

よむといはれ侍りしすゑくは、すこし人にまさりて、そのをりの歌はこれこそありけれ。さはいへど、それが子なれば、などいはれたらんこそかひある心地し侍らめ。つゆとりわきたるかたもなく、さすがに歌がましく、我はとおもへるさまに、さいそによみいで侍らんなき人のために、もいとほしく侍るなど、まめやかに啓すれば、わらはせ給ひて、さらばたゞ心にまかせよ。われはよめともいはじとの給はすれば、いと心やすくなりぬ。

○てづからをりたりと云々 前に明順の「この下わらびはてづからつみつる」といふを取りいでしなり。○もと △二〇〇うけたまはりたりや 我が意をうけたまはりて、郭公の事をいひいでたりと戯れさせ給へるなり。是も前に中宮の歌よめと仰せられたるに對へてみるべし。○この歌よみ侍らじ云々 前に「今はすさまじくなりて侍るなり」とて歌

よまざりしに對へてみるべし。○えさふらふまじき 其席を退かんと也。○歌よむといはれ侍りしすゑく 少納言は深養父が曾孫、元輔が娘なればなり。○さはいへど さは「そのをりの歌云々」をさしていふ。○つゆとりわきたるかたもなく 人にすぐれて、一ふしをかきしき事もなしとなり。○さすがに歌がましく云々 抄に「卑下なうしてよむ心はいへり」○なき人 深養父元輔をいふ。

「今は歌の事おもひかけ侍らじ」などいひてある比、庚申せさせ給ふとて、内大臣殿いみじう心まうけさせ給へり。夜うちふくる程に、題いだして女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがしいだすに、宮の御前にちかくさふらひて、物啓しなど、こと事をのみいふをおとゞ御覽じて、なぞか歌はよまではなれおたる。題とれとの給ふを、さる事おつたまはりて、歌よむまじくなりて侍れば、おもひかけ

○ことよひなる事

侍らずと申すを^{内大臣}ことやうなる事。まことにさる事やは侍る。などかはゆるさせ給ふいとあるまじき事なり。よしこ
と時はしらず。こよひはよめなどせめさせ給へど。きよ
きもいれでさふらふに。こと人どもよみいだして。よし
あしなどさだめらるゝ程に。いさゝかなる御文をかきて
給はせたり。あけてみれば、

も^宮とすけが後といはるゝ君しもやこよひの歌にはづ
れてはをるとあるをみるに。をかしき事ぞたぐひなきや。
いみじくわらへば「何事ぞく」とおとゞものたまふ。
その人の後といはれぬ身なりせば。こよひの歌はまづ
ぞよままし。つゝむ事さふらはずば。干歌なりとも。これよ
りぞいでまうでこまし」と啓しつ。

○庚申 庚申の夜寝ねすしてゐるを庚申待といふ。○内大臣殿 伊周
公なり。内大臣に任せられしは、公卿補任によれば、正暦五年八月廿八日
なり。○ゆるがし 歌よまんと心構してなり。○ちかくさふらひて 少
納言がなり。○さる事うけたまはり 前に中宮の「われはよめともい
は」と仰せられしをいふ。○よしこと時はしらす 其意に任せて、姑く許
すとも意なり。○つゝむ事云々 拙き歌よまば父祖の辱にもやとて、
つゝしむなり。しからざらんには、御催促なくともよみいでんとなり。

百 段

しきにおはします。比、八月十餘日の月あかきよ。右近の内
侍に琵琶ひかせてはしちかくおはします。これかれ物い
ひわらひなどするに、廂の柱によりかゝりて物もいはで
さふらへば^宮などかうおともせぬ物いへ。さうぐしきに
とおほせらるれば^清たい秋の月の心をみ侍るなり」と申せ

ば^宮さもいひつべしとおほせらる御かた^宮と君達うへ人
 など御前に人のいとおほくさふらへば女房と物語して
 めたるに物をなげ給はせたるあけてみればおもふべし
 やいなや第一ならずばいか^宮とかいせ給へり御前にて
 物語などするついでにもすべて人には一におもはれず
 ば更に何にかせんたゞいみじうにくまれあしうせられ
 てあらん二三にてはしぬともあらじ一にてをあらんな
 どいへば一乗の法なりと人々わらふ事のすぢなめり筆
 紙給りたれば^宮九品蓮臺の中には下品といふともとかき
 てまゐらせたれば^宮むげにおもひくんじにけりいとわろ
 し。いひそめつる事はさてこそあらめとの給はすれば^宮人
 にしたがひてこそと申す^宮それがわるきぞかし第一の人

○(さるは)御前にて

○くんじ一風

に又一におもはれんとこそおもはめとおほせらるゝも
 いとをかし。

○しき 職御曹司なり。○右近の内侍 △七〇よりかゝりて 少納言
 がなり。○秋の月の心 後撰秋中に月影はおなじ光の秋のよをわきて
 みゆるは心なりけり。○御かた^宮君達 中宮の御身内のかた^宮其
 他の君達なり。○おもふべしや 豊頼翁の説に此所は后宮より清少を
 思ひたまはんか否との御問なるは次文によりて明か也。○第一ならず
 ば 中宮が第一とおぼしめさずばと也。○御前にてヨリすぢなめりマ
 デ 少納言がやくいひける事を取立て第一ならずばと仰せられ
 し由来を解くなり。○一乗の法 方便品に十方佛土中唯有一乘法無二
 亦無三除佛方便説とあるを引きて他の女房達が少納言のすべて人に
 は一におもはれずば云々といひしをわらふなり。○筆紙給りたれば
 少納言に筆答せさせ給はんとてなり。○九品蓮臺の中云々 朗詠集に
 載せたる慶保胤が極樂寺建立願文に十方佛土之中以西方爲最九品蓮
 臺之間雖下品應足とあり中宮に仕へまつるを蓮臺にたとへさては下

品にても満足すとなり。参照 觀無量壽經〇さてこそあらめ 其儘
に押通せとなり。〇人にしたかひて 通常の人には第一といはれんと
思へど、中宮には下品とてもとなり。

百一段

〇(晴のほれをえ
て)

中納言殿まゐらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに「隆家こそい
みじきほねをえて侍れ。それをはらせてまゐらせんとす
るを、おぼろげの紙ははるまじければ、もとめ侍るなり」と
申し給ふ宮いかやうなるにかある」ととひきこえさせ給へ
ば隆家すべていみじく侍り、さらにまだみぬほねのさまなり
となん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」と、こ
とたかく申し給へば清さては、扇のにはあらで、くらげのな
りときこゆれば隆家これは隆家がことにしてんとて、わらひ
給ふ。かやうの事こそかたはらいたきこと。のうちにいれ

〇(ばかりの(骨)

〇くらげ―海月

つべけれど、ひとつなおとしそといへば、いかゞはせん。

〇中納言殿 藤原隆家卿なり、中宮の御兄なり。〇おぼろげの紙云々
なみくの紙は、骨に不相應なればよき紙を求めつゝありとなり。〇さ
ては 前に「まだみぬほね」とあるをうけていへる也。〇くらげのなり
まだみぬほねならば海月の骨なりと戯ぶるゝなり。増賀上人の歌に「み
づはさす八十あまりの老の波海月のほねにあひにけるかな」〇かたは
らいたき 前述の事はかたはらいたく聞ゆれば、かゝでやむべかりし
を、一事も脱すまじく、人々いへば、かくはかきいでしとなり。此艸紙の題
目の、かたはらいたきもの」とあるをさしていふにはあらず。

百一段

〇(内より)御使に

雨のうちにはへふるころ、けふもふるに、御使にて式部のぞ
う信經まゐりたり例のしとねさしいだしたるを、常より
もとほくおしやりてゐたれば清あれはたれがれうぞ」とい
へば、わらひて侍かゝる雨にのほり侍らば、あしがたつきて、

〇(雨に)あしがた
つきて

○など(まのたまふ)
○せんぞくれう
毘撥料

いとふびんにきたなげになり侍りなんといへばなど。せ
んどくれうにこそはならぬといふを信經これは御まへにか
しこうおほせらるゝにはあらず、信經があしかたの事を
申さざらましかば、えのたまはざらまし」とてかへす。
いひしこそをかしかりしか。あまりなる御身深めかなと、
かたはらいたし信はやうおほきさいの宮に、ゑぬたきとい
ひて、名だかきしもづかへなんありける。美濃守にてうせ
にける藤原のときからの、藏人なりける時、しもづかへど
ものある所にたちよりて時柄これやこの高名のゑぬたき、な
どさもみえぬといひける返事返事にそれはときからに、さも
みゆるなどいひたりけるとなん。かたきにえりても、いか
でかざる事はあらんと。殿上人、上達部までも興ある事に

○おほきさい大后
○ときから時柄

○のたまひける
○と(信經に)き
えたり

のたまひける、又さりけるなめり。今日までかくいひつた
ふるは「ときこえたり信經それ又ときがらがいはせたるなり。
すべてたゞ題がらんふみも歌もかしこき」といへば信
にさもある事なり。さはいひたらん歌よみ給へといふ信經。
とよき事といへば信御前におなじうはあまたをつかりま
つらんなどいふほどに、御かへりいせぬれば信經あなおろし、
まかりにぐとてたちぬるを人々いみじうまなもかなもあ
しうかくを、人のわらひなどすれば、かくしてなんあると
いふもをかし。

○よき事(なり)

○信經 尊卑分脈によれば、藤原爲長の子なり、勅物に、長徳元年正月十
一日藏人、三年正月式部丞とみえたり。○たれがれうぞ 他人のため
に設けたるにはあらぬをいふ。○せんぞくれう 春曙抄に「毘撥料にや順
和名云、毘撥也、今案毛席也、俗に猫の皮にて作ると云々、せんじよくを

せんぞくといひて、足のよこれし事をいふに付て、洗足料にこそならめと秀句に云なり。○御まへ 少納言をさせり。○あまりなる御身ほめ抄に、信經のわがさえのやうにかへすくいふを、御身ほめかなと云なり。○はやう云々 春曙抄に別行として、時柄と少納言との問答とせり。今は、信經と少納言との問答として、別行とせず、又時柄、えぬたきの問答を少納言の詞の内にあるものと見たるは、豊頼翁の説に従ひたる也。

参照 本居雜考 ○おほきさいの宮 安子と申す、村上天皇の后、帥輔公の女。○ときから 勘物に、時柄康保五年正月廿八日美濃守。○さもみえぬ えぬたきといふ名は、異様にて、よくしれわたれど、其人を見ればさもなしとなり。○ときからにさもみゆる 時節がらさやらにみゆと答へたるにて、時柄の名を兼ねていへるなり。○かたき 恭のかたき、遊のかたきなどに同じく、相手の意なり。○ときからがいはせたる 時柄の詞あればこそ、えぬたきも奇言を發したるなれ。さればえぬたきの詞は時柄がいはせたりと也。前の「これは御まへにかしこう云々」といふに對へてみるべし。○さはいひたらん 前の「あしがた」せんぞくれうなどを

○(又この信經の) 作物所
○作物所一ツクモ
ドコロ
○(そのあやうに) せき(そ)だる

○(信經は) おほきにはらだち

いふ。○あまたをつかうまつらん 中宮の御前にて、あまたうちよりて、かゝる歌をよまんとなり。○御かへりいでぬれば云々 此御かへりは信經がもてきたりし御文の御返事なり。さて信經は此御返事のいづるを幸にして、其場を避けしなり。

作物所の別當する比、誰がもとにやりけるにかあらん、物のゑやうやるとして、これがやうにつかうまつるべし」とかきたるまんなのやう、文字のよにしらずあやしきをみつめて、それがかたはらに、これがまゝにつかうまつらば、こ

とやうにこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々とりてみて、いみじうわらひけるに、おほきにはらだちてこそうらみしか。

○作物所 禁中の工藝所也、拾芥抄に、作物所在進物所西、有別當預熟食同、並所内、際○別當する比 勘物に、長徳二年五月三日藏人兵部丞信經補作物所別當○誰がもと これは細工人などにや。○物のゑやう 製

造品の様式也源氏胡蝶に物のゑやうにもかきとらまほしき又梅枝に
「物のしたかたゑやうなどをもごらんじいれつ」○これがまゝに云々
「是は」これがやうにつかうまつるべし」とかける文字をさしていふ。さ
て其製造品に此文字も加へて造りたらばとの意なりまゝといふに心
をとめてみるべし。

百三段

淑景舎春宮にまゐり給ふほどの事などいかゞめでたか
らぬ事なし。正月十日にまゐり給ひて宮の御かたに御文
などはしげりかよへど御對面などはなきを二月十日宮
の御方にわたり給ふべき御せうそこあれば常よりも御
しつらひ心ことにみがきつくるひ女房なども皆よろい
したり夜なかばかりにわたらせ給ひしかばいくばくも
なくてあけぬ登華殿の東のひさしの二間に御しつらひ

○いかゞ(ありけ
ん、すてて)

○せうき(清景
の御せう)

○(御格子の御
うしの南)

はしたりつとめていとく御格子まゐりわたして、曉に
殿うへひとつ御車にてまゐり給ひにけり宮は御ざうし
の南に四尺の屏風を西東にへだてて北もきにたてて
御しとねばかりおきて御火桶まゐれり御屏風の南御帳
の前に女房いとおほくさふらふ。

○春宮 三條天皇此時東宮にておはします。○正月十日 十日とある
はいかが日本紀略によれば長徳元年正月十九日也。○二月十日 是も
いかが古本に十の下によの字あり下文と併せ考ふべし。○御格子まゐ
りわたして こゝはあぐるなり。○殿 關白殿なり道隆公をいふ。○う
へ 關白殿の北方高内侍なり。○四尺の御屏風を云々 此へだててと
は屏風の兩端を折りたるをいふ東の端も西の端も前の方へ折りたれ
ば東西の隔となりたるなり。さて其正面は北向になれるなり次に御屏
風の南とあるは其後をいふ。

こなたにて御ぐしなどまゐる程淑景舎はみ奉りしや」と

○まだいっかで
(見奉らん)
○わづかに(み奉
りき)

とはせ給へば清まだいかでか積善寺供養の日御りしろを
わづかに宮ときこゆればその柱と屏風とのもとによりて、
わがうしろよりみよ。いとうつくしき君ぞとのたまはす
ればうれしくゆかしさまさりて、いつしかとおもふ。紅梅
のかたもんうきもんの御ぞども、紅のうちたる御ぞ三重
がうへに、只ひきかさねて奉りたるに宮紅梅にはこききぬ
こそをかしけれ。今よりは紅梅はきでもありぬべし。され
ど萌黄などのにくければ、紅にはあはぬなりとのたまは
すれど、只いとめでたくみえさせ給ふ。奉りたる御ぞに、や
がて御かたちのにほひあはせ給ふぞ。なほことよき人も
かくやおはしますらんとぞゆかしき。さてゐさりいでさ
せ給ひぬれば、やがて御屏風にそひつきてのぞくを、あし

○にくければ(猶
紅梅をぞきぬされ
ど紅梅は)

○こと一他

○みさり一藤行

○ふたつばかり
(きき)
○も一裳
○(それを)ひきか
けて

○うちき一桂

かめり。うしろめたきわざとときこえごつ人もあり。いとを
かし。御障子のひろうあきたれば、いとよくみゆ。うへはし
ろき御ぞども、紅のはりたるふたつばかり、女房のもなめ
り。ひきかけて奥によりて、東むきにおはすれば、たゞ御ぞ
などぞみゆる。淑景舎は北にすこしよりて、南むきにおは
します。紅梅どもあまた、こくうすくて、うへに。こきあやの
御ぞ、すこしあかき蘇芳の織物のうちき、もえぎのかたも
んのわかやかなる御ぞ奉りて、扇をつとさしかくし給へ
る。いとみじくげにめでたくうつくしとみえ給ふ。殿は
うすいろの御直衣、もえぎの織物の御さしぬき、紅の御ぞ
ども、御紐さして、廂の柱にうしろをあてて、こなたさまに
むきておはします。めでたき御ありさまどもをうちき

○このたぐひは
いさや(あらん)

て、例のたはふれごとをせさせ給ふ。淑景舎のゑにかきたるやりにうつくしげにてゐさせ給へるに、宮いとやすらかに、今すこしおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御ぞに、ほひあはせ給ひて、猶たぐひはいかでかとみえさせ給ふ。

○こなたにて しつらひし御坐をいふ。○御ぐしなどまゐる 御装束せさせ給ふにつき、御髪をつくらふなり。○積善寺供養 日本紀略正暦五年二月の件に、廿日壬寅關白(道隆)供養積善寺、中宮(定子)行啓、東三條院(詮子)同以御幸云々、扶桑略記、本朝世紀、百鍊鈔皆同じ。○紅梅の云々 是より中宮の御装束を記す。○かたもん 貞丈の説に、綾の文を糸をしづめて、かたくおりたるを固文と云。○うきもん 貞丈の説に、絲をうかめておりたるを、うけ文と云也。○御ぞども 表着なるべし。○うちたる御ぞ 打衣なるべし。○今よりは紅梅云々 紅梅のさぬは十一月より二月までさるものなるに、此日は二月の半も過ぐれば、かくはのたまふな

○この御った(の御てうづ)
○(登華殿の)から
廂のこなた

り。○ことよき人 他の貴人なり。抄に、しげいさの君の事をおもふにも、此君のごとくにやあらんずらんとよそへおもふ心なり。○のさりいでさせ給ひぬれば 中宮が御對面のためになり。○女房のも 中宮の御前なれば、女房の裳ひきかけて、敬意を表し給ふ也。○紅梅ども 內衣なるべし。○こきあやの御ぞ 重桂なるべし。○わかやかなる御ぞ 唐衣なるべし。○御紐さして 春曙抄に、直衣のいれひもをさし給ふ御手すさびなるべし。○こなたさま 少納言の方なり。

御てうづまるる。かの御かたは宣耀殿、貞觀殿をとほりて、わらは二人、しもづかへ四人してもてまるるめり。から廂のこなたのらうにぞ女房六人ばかりさふらふ。せばしとてかたへは御おくりして、皆かへりにけり。櫻のかざみもえぎ紅梅などいみじく、かざみながくしりひきて、とりつぎまるらす。いとなまめかし。織物のからきぬども、こぼれいでて、すけまさのうまのかみのむすめ少將の君、北野

○くんたい一裙帶
○ひれ一領巾
○(御手水を)とり
つぎて

の三位のむすめ宰相君などぞちかくはある。あなをかし
とみる程に、こなたの御てうづは、番の采女のあをすそご
のもからきぬ、くんたいひれなどして、おもてなどいとし
ろくて、下づかへなどとりつぎてまるる程、これはたおほ
やけしう唐めいてをかし。

○おのの御膳

○御てうづまるる 旁註に「翌朝のありさま也」○かの御かた 淑景舍
をいふ。即桐壺也。○宣耀殿貞觀殿 此二殿は淑景舍と登華殿との間に
當れり。○から廂 唐風の廂にて、屋根をそらせたるなり。○かたへは御
おくりして 女房などの半分は、御手水の處まで、御送して退くと
なり。二百五十六段に「院司上達部など、このたひはかたへぞつかうまつり給
ひける」○北野の三位 公卿補任に「菅輔正右中辨正五位下淳茂孫云々」
又「壽永三年三月日贈正二位(現神北野宰相殿是也)」○こなたの御てうづ
中宮の御手水を申す。○番の采女 抄に「當日の番の采女云々」
おものををりになりて、みぐしあげまるりて藏人も御ま

○(いまみ)垣間
見

かなひも、髪あげてまるる程に、へだてたりつる御屏風も
おしあけつれば、かいまみの人かくれみのとられたる心
地してあかずわびしければ、みすと儿帳との中にて、柱の
もとよりぞみたてまつる。きぬのすそ裳などは、皆みすの
そとにおしいだされたれば、殿のはしのかたより、御覽じ
いだして、あれはたそやかのすみ、のまよりみゆるはとと
がめさせ給ふに、少納言が物ゆかしがりて侍るならんと
申させ給へば、あなはづかし。かれはふるきとくいをいと
にくげなるむすめどももちたりともこそみ侍れなどの
たまふ御けしきいとしたりがほなり。あなたにもおもの
まるるうらやましくかたつかたのは皆まゐりぬめりと
くきこしめして、おきなおむな、に御おろしをだに給へな

○とくい一得意

○御おろしをだに
給へなど(のたま
ひて)

○ものくしう

○すくせー宿世

○(人々大納言殿
中將殿などに)御
わらふだなど

○もひとり水司

○理髮—カミアゲ

ど、只日一日さるがふ事をし給ふ程に、大納言殿、三位中將、松君もゐてまゐり給へり。殿いつしかといだきとり給ひて、膝にすゑ給へるいとうつくし。せばき椽に、所せき御装束のしたがさねなどひきちらされたり。大納言殿はものものしうきよげに、中將殿はらうくしう、いづれもめでたきをみ奉るに、殿をばさるものにて、うへの御すくせこそめでたけれ。御わらふだなどきこえ給へど、陣につき侍らんとて、いそぎたち給ひぬ。

○みぐしあげ 紫式部日記に「夜ふくるまゝに、つきのくまなきにうねめ、もひとり、みぐしあげども、とのもり、かんもりの女官かほもしらぬをり」とあるを、清水宣昭は「みぐしあげ、かならず女官の名なるべし」とて、台記の別記に「理髮六人」とあるを引きて證せり。○藏人 女藏人なり。○御まかなひ 紫式部日記に「おもものまゐるとて、女房八人ひとつ色にさう

ぞきて、髪あげ白きもとゆひして、しろき御盤もてつづきまゐる。今宵の御まかなひは、宮内侍いともものくしく、あざやかなるやうだいに、もとゆひはえしたる」とあるを、宣昭は「御まかなひは、陪膳の女房の中にむねとあるをいふなるべし」といへり。○髪あげて 貞丈の説に「女房式正ノ時ハ垂髪シテ、頂ノ上ニ髪ヲ溜ノ如ク束ネテ、是ヲカブト名ヅク。其カブニ叙子ヲサス也」○かいまみの人 少納言をいふ。○かくれみの 鬼神の身を隠す具といひ傳へしにや。保元物語に「昔正しく鬼神なりし時は隠篋、隠笠、浮履劍などいふ寶ありけり」○かのすみのま 二百五十六段に「すみのまより、女房しとねさしいで」とあるを併せ考ふべし。○ふるさとくいを 此をば感謝の也。○あなたにも 中宮に對へて、淑景舎の方を申す。○おきなおむな 翁は關白殿自らをの給ひ、姫は北方をさしての給ふ也。○さるがふ事 滑稽戲謔などして、當坐の興を催すなり。後世の猿樂にあらず。参照 西田直養の被舎漫筆。○大納言殿 伊周公なり。○三位中將 隆家卿なり。○松君 伊周公の男道雅の童名なり。○殿をばさるものにて 殿の幸福は更にもいはずとなり。○御わらふだ

云々 圓坐をすゝむる也。○いそぎたち給ひぬ 大納言殿三位中將な
どがなり。

○しばしありて
(内より)
○宮の御方へま
かりたれば

○ちかより周頼
○淑景舎の御方
へまゐたり

○淑景舎はとみ
にも御返きこえ
給はむを

しばしありて、式部丞なにかしとかや、御使にまゐりたれ
ば、おもものやどりの北によりたる間にしとねさしいでて
すゑたり。御返はけふはとくいださせ給ひつ。まだしとね
もとりのいれぬ程に、春宮の御使に、ちかよりの少將まゐり
たり。御文とりいれて、渡殿はほそき椽なれば、こなたの椽
に、しとねさしいでたり。御文とりいれて、殿うへ、宮など御
覽じわたす。御返はやうなどあれど、とみにもきこえ給は
ぬを開白なにかしがみ侍れば、かき給はぬなめり。さらぬをり
は、まもなくこれよりぞきこえ給ふなるなど申し給へば、
御おもてはすこしあかみながら、すこしうちほゝゑみ給

○こうちき一小孩

○宮の御子たちと
て(この子のやう
なるを)
○さる御事の(な
き)

へる、いとめでたしとくなど、うへもきこえ給へば、おくざ
まにむきてかゝせ給ふ。うへちかくより給ひて、もるとも
にかゝせ奉り給へば、いとゞつゝましげなり。宮の御方よ
りもえぎの織物のこうちき、はかまおしいだされたれば、
三位中將かづけ給ふ。くるしげにもちてたちぬ。松君のを
かしう物のたまふを、誰も誰もうつくしがりきこえ給ふ。
宮開白の御子たちとてひきいでたらんに、わろくは侍らじか
しなどのたまはするを、げになどか今までさる御事の「と
ぞ心もとなき。

○式部丞なにかし 信經なり。△一〇二〇おもものやどり 抄に「御膳
宿所は大盤所の内にある所なり」○ちかより 道隆公の息、頼親卿の弟
なり。○渡殿 おものやどりの北によりたる間にゆきかふためのなり。
○こなたの椽 登華殿のさるへき所のなり。○なにかし 自稱にかく

いふは、源氏帚木になにがしがいやしきいさめにてとある類なり。○さ
らぬをり なにがしがみ侍らぬをりはとなり。○つゝましげ 耻ぢ給
ふをいふ。○くるしげに 俗にいふキノドクに思ふさまなり。是は周頼
が辱きあまり、かゝるさましたるなり。○宮の御子たち云々 敦康親王
は長保元年十一月六日に生れさせ給へば、此時かくはいへるなり。

○うちへはうちそ
よめき

未の時ばかりに、筵道まゐるといふ程もなく、うちそよめ
きいらせ給へば、宮もこなたによらせ給ひぬ。やがて御帳
にいらせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめきいでぬめ
り。らうに殿上人いとおほかり。殿の御前に、宮司めして、く
だものさかなめさす、人々ゑはせなどおほせらる。誠に皆
ゑひて、女房と物いひかはす程、かたみにをかしとおもひ
たり。日のいる程に、おきさせ給ひて、山井の大納言めしい

○らう一廊
○宮司一ミツカ
サ

○御選に(さふら
ひ給ふ

れて、御うちきまゐらせ給ひて、かへらせ給ふに、殿大納言
殿、山井の大納言、三位中將、内藏頭など皆さふらひ給ふ。

○未の時 今の午後二時なり。○筵道まゐる 天皇のこなたへ入らせ
給ふとしての設なり。是は前の御使への御返事にて、入らせ給ひしなるべ
し。勘物に「信經記云、二月十八日。渡御登華殿、仰掃部寮敷筵道、午刻供朝膳。
未刻渡御、頭中將美信朝臣持御劍於南妻、有侍臣盃酒事、申刻還御。」○うち
そよめき 御衣の音なり。○宮もこなたに 一方へよりて迎へさせ給
ふなり。○御帳にいらせ給ひ 暫時の御休息なり。○人々 殿上人をい
ふ。○山井の大納言 道頼卿也。伊周公の兄也。○御うちきまゐらせ給ひ
て 源氏紅葉賀に「うへはみうちぎの人めして」とあるを、岷江入楚に「御
さうぞくめさする衣文の人と也」といへり。こも大納言めして御装束を
とゝのへさせ給ふなり。○内藏頭 頼親なり。陸家卿の弟なり。

○衣文一エセン

○今宵はえなん
(まゐるまじき)

宮のほらせ給ふべき御使にて、うまの内侍のすけまゐり
たり。今宵はえなんなどしぶらせ給ふを、殿きかせ給ひて

○さりとしいひで
かゝる事の侍る
へき
○みおくりきこえ
て後にのほり侍
らん

○宮はのほらせ
給ふ
○女房のいでね
る道の程もまき
じ殿のつたまひ
し

○移橋一ツツシマ
シ

いとあるまじき事はやのほらせ給へと申させ給ふに、又
春宮の御使しきりにある程いとさわがし御むかへに春
宮の侍従などもまゐりてとくとそゝのかしきこゆまづ
さばかの君わたしきこえ給ひてとのたまはすればさ^宮
ともいかでかあるを猶みおくりきこえんなどのたま
はする程いとをかしうめでたしさらばとほきをさきに
とてまづ淑景舎わたり給ひて殿などかへらせ給ひてぞ
のほらせ給ふ道の程も殿の御さるがふ事にいみじくわ
らひてほとくうちはしよりもおちぬべし。

○うまの内侍のすけ 作者部類に馬内侍大和守馬權頭時明女○春宮
の御使 淑景舎を召させ給ふなり○かの君 淑景舎を申す○とほき
さきに 登華殿より春宮の御方へ遠きをいふ但し上の御局に比べ
てなり○うちはし 鈴屋翁の説に移橋をつゞめたる名なりよのつね

の橋はいつも同じ所にかゝりて、ところをかふる事はなきを、これは時
にのぞみて、いづこへも、いづこへも用ある所へもて行て渡すかりそめ
の橋にて、こゝかしこへうつす橋といふ意なり云々

百四段

殿上より梅の花の皆ちりたる枝を、これはいかにといひ
たるに、^落只はやくおちにけりといらへたれば、その詩をじ
ゆして、黒戸に殿上人いとおほくゐたるを、うへの御前き
かせおはしまして、よろしき歌などよみたらんよりも、か
かることはまさりたりかし、よういらへたりとおほせら
る。

○はやくおちにけり 紀長谷雄の詩の序に「大瘦嶺之梅早落、誰問粉粧」
○うへ 天皇を申す○かゝること 古詩など取出でて答へしを仰せ
られしなり。

○枝を(おくりて)
これはいかに見
給ふ

百五段

二月晦日、風いたくふきて、空いみじくくろきに、雪すこし
うちちりたる程、黒戸に主殿司きて「かうしてさふらふ」と
いへば、よりたるに、主殿司「これ公任の宰相殿」とあるをみれば、
ふところがみに、たゞ

○公任の宰相殿の
（奉らさ給ふ）

○誰々か（おぼす
る）

○はづかしき（人
々にてその）

○（宮の）御前に

すこし春あること、ちこそすれ」とあるは、げにけふのけ
しきにいとよくあひたるを、これがもとはいかゞつくべ
からんとおもひわづらひぬ、清誰々か」とへば、主殿司「それ」と
いふに、清「皆はづかしき中に、宰相の御いらへをば、いかゞこ
となしびにいひいでん」と心ひとつにくるしきを、御前に
御覽せさせんとすれども、うへのおはしまして、おほと
ごもりたり、主殿司は「とく」といふげにおそくさへあ

○としかた（俊賢
○中將にておはせ
し（ほどに）

らんは、とり所なければ、さばれとて、
空さむみ花にまがへてちる雪に「とわなゝくわなゝく
かきてとらせて、いかゞみ給ふらんとおもふもわびし。こ
れが事をきかばやとおもふに、せしられたらばきかじと
おぼゆるを」としかたの宰相など、なほ内侍にそゝしてな
さんとなんの給ひし」とぞ、左兵衛督の中將にておはせし
かたり給ひし。

○かうしてさふらふ かく文もちてさふらふとなり。○よりたるに
少納言が主殿司の方になり。○公任の宰相 公卿補任によれば、頼忠公
の一男にて、参議に任せられしは正暦三年なり。○つくへからん つく
は後世の連歌のさまにするなり。此すこし春あるの連歌は、菟玖波集春
の部にいれり。○それゝ 公任卿と共におはする人を、一々擧げて答
へし也。○皆はづかしき云々 一坐は皆すぐれたる人々にて、其中にわ

けてすぐれたるは宰相なるに、其御答をとなり。○ことなしび 美隆の
 説に「この事なしびもよくもあらず、あしくもあらず、常體なる意なり。
 さるは御返事せんに珍しからの常體の事は、いかゞ少しかどくしく
 いひいでずしてはとの意なり」△三〇四〇うへ 天皇を申す。○とく
 とく 返事を催すなり。○これが事 付けたる句の批評をいふ。○そし
 られたらばきかじ 少納言の付句を、公任卿を始め、其坐にありし人々
 にそしられたらんには、其由きかする人もなかるべしとなり。○としか
 たの宰相 源俊賢なり、公卿補任によれば、高明公の三男にて、參議に任
 せられしは、長徳元年八月廿九日なり。この連歌の時、公任卿と一坐した
 る人なるべし。○内侍にそうして云々 此内侍も典侍なるべし、俊賢卿
 少納言を典侍に推薦せんといひたりとなり。是にてそしられぬ事明か
 なり。○左兵衛督 古本延徳本並那佐本の脇書によれば、藤原實成なり。
 實成は公季公一男なり、公卿補任によれば、長徳四年十月廿二日右近衛
 中將に任せられたり。又左兵衛督に任せられしは、寛弘六年三月四日な
 り。此時は中將などかわられぬなり。

○さうじ—精選

百六段

はるかなるもの 千日のさうじはじむる日。はんびのを
 ひねりはじむる日。みちの國へゆく人の逢阪の關こゆる
 ほど。うまれたるちごのおとなになるほど。大般若の御讀
 經ひとりしてよみはじむる。十二年の山ごもりのはじめ
 てのほる日。

○千日のさうじ 千日の間精進潔齋して修行するをいふ。○はんびの
 を 唐服よりいでしものなり。西三條裝束抄に「唐ノ高祖、其袖ノ長ヲ制
 シテ減ズ、是ヲ半臂ト號ス」とあり。其を満佐須計裝束抄に「これを近代
 ほそきをして、くびをゆひて、ひさまはしてしたることやすきれうなり。
 麗しくはさがりたるをのやうにて、八尺ばかりにて、ふたすおあるなり」
 とあり。○大般若 此經は四所十六會に亘れる説法にて、金剛般若は其
 第九會に當り、理趣分は其第十會にあたり。今玄奘三藏の譯せるは六
 百卷なり。○十二年云々 △六九

百七段

○しそく—脂燭

方弘はいみじく人にわらはるゝ物をやいかనికిくらん。供にありくものどものいと人々しきをよびよせて何しにかゝるものにはつかはるゝぞいかおほゆるなどわらふ物いとよくするあたりにて下襲うへのきぬなども人よりはよくてきたるをしそくさしつけやきあるはこれはこと人にきせばやなどいふにげにぞ詞づかひなどのあやしき里にとのおもものとりにやるにをのこ二人まかれといふに一人してとりにまかりなんものをといふに「あやしの男や一人してふたりのものをばいかでもつべきぞ。一ますがめに二ますはいるや」といふをなでふ事とする人はなけれどいみじうわらふ人の使のきて御返

○まめやくべたる
(とて返事かくべき墨筆なたづれまどひ)この殿上の

事とくといふをあなたにくの男やなどかうまどふかまどにまめやくべたるこの殿上の墨筆は何ものぬすみかくしたるぞ飯酒ならばこそほしうして人のぬすまめといふを又わらふ女院なやませ給ふとて御使にまゐりてかへりたるに院の殿上人は誰々かありつると人のとへば「それかれなど四五人はがりいふに又は」ととへば「さ

○むくろごめ—籠

はいぬる人どもぞありつるといふをわらふも又あやしき事にこそはあらめひとまによりきてわが君こそ物きこえんまづと人ののたまへる事ぞといへば「何事にか」とで几帳のもとによりたればむくろごめにより給へといふを「五たいごめに」となんいひつるとで人にわらはる除目の中の夜指油するに燈臺のうちしきをふみてたてる

○中の夜(方弘が)

○ゆたんゝ油單
○したうづー襪

に、あたらしきゆたんなれば、つようとらへられにけり。さしあゆみてかへれば、やがて燈臺はたふれぬ。またうづはうちしきにつきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。頭つき給はぬ程は、殿上の臺盤に、人もつかず。それに方弘はまめひともりをとりて、小さうじのうしろにて、やをらくひければ、ひきあらはして、わらふ事ぞかぎりなきや。

○方弘 △五四○いと人々しき云々 抄に「おとなしくさかしき者をよびて、まさひろがごとくに愚なる人に、何とてつかはるゝぞと他の人より問ふ心なり」○物いとよくする 抄に「呉服所など成べし」とあり。さる所にて、人よりよくしたててきたるなるべし。○しそく 貞丈の説に「松の木にて作り、長サ一尺五寸程に切りて、ふとさは徑り三分計に丸く削て、先の方を炭火にてあぶりて、黒く焦す也。焼て炭にするは悪。其上に油を引てあぶりがわかすべし。扱紙屋紙を廣サ五分計に裁て、脂燭の本を左巻にまくなり」○さしつけやき 方弘の所作の輕卒なるをいふ○

これはこと人云々 此裁縫は自己に適せず、他人に着せばやとなり。○ふたりのもの 二人してもつべきものとの義なるべし。○などかうまどふ云々 抄に「如此いそぎまどふは、釜土に菽や煎ながら來りつるかとなり。是せはくしき故を云也」とあり。さてこの處は、頭書も抄の説による。○女院 詮子を申す。○院の殿上人 院に殿上人といふ程の意なり。○又はととへば 美隆の説に「此又はは、また外にはの意なり。赤染衛門の歌に、身をかくすかたなきものはわれならでまたはやけののきいすなりけり」と同じいひ様なり」○いぬる人 退去する人なり。○又あやしき事云々 元來恐なる方弘の事なれば、かばかりの事は、笑ふにも足らぬを笑ふがあやしとなり。○ひとま 人のみぬ間なり。万葉十一に「人間もり蘆垣ごしにわぎもこをあひみしからにことぞさだおほき」○わが君こそ △八三○まづと人の云々 此まづは俗にマアといふに同じ。こゝはまづしかくゝと人ののたまへる事ぞとなり。○むくろごめ 身体全くといふ意なり。此こめはくるめの意なり。根ごめ、車ごめなどの類なり。□一八一、二五六○中の夜 十二日の夜なり。○うちしき 門

室有職抄に「打舖ハ非莊嚴之儀タ」アブラコボサジ料也云々○ゆたん
 貞丈の説に「此ゆたんは布に油を引たるなり」とあり是を打敷にした
 る也○とらへられ 足につきて離れぬをいふ○したうづ シタグツ
 の音便なり和名抄に襪を之大久豆とよみ説文を引きて「足衣也」といへ
 り○道こそ震動 地上にひやく音をいふ古本に「大地しんどう」とある
 にてもしるべし○頭 藏人頭なり○ひきあらはして 抄に「隔を引あ
 けなどして見あらはし笑」となり

百八段

關は 逢阪の關須磨の關鈴鹿の關くきだの關白川の關
 衣の關たゞこえの關ははゞかりの關にたとしへなくこ
 そおほゆれよこばしりの關清見の關みるめの關よしな
 よしなの關こそいかに思ひかへしたるならんといとし
 らまほしけれそれをなこそその關とはいふにやあらん逢
 阪などをさおもひかへしたらばわびしからんかし足柄

○なこそ勿來

の關

○逢阪の關 近江○須磨の關 攝津○鈴鹿の關 伊勢○くきだの關
 細流抄に「奥州菊田刺關なり俗にくきたのせきといふ○白川の關
 奥州○衣の關 奥州なり詞花別に「諸共にたゞましものをみちのくの
 衣の關をよそにきくかな○たゞこえの關 未詳○はゞかりの關 八
 雲御抄に「陸奥○たとしへなく 名のいみじく異なればかくはいふな
 り○よこばしりの關 八雲御抄に「駿河なり○清見の關 駿河○みる
 めの關 未詳○よしなくの關 陸奥○いかにおもひかへし よし
 なしに同じく打ちすてたる意あり折角思ひたちたる事をいかによし
 なと思ひかへしたるならんとなり○それをなこそ云々 春曙抄に「よ
 しなしな來そといふやうなればなり○逢阪など 逢ひたき人を故あ
 りてよしなくなこそと思ひかへしたらばわびしからんとなり○足
 柄の關 相摸

百九段

森は おほあらしきの森しのびの森こゝろの森こがらし

○菊田刺キケタ

○おほあらしき大
荒木

○しのび忍
○こがらし木枯
○しのだ信太
○神奈備カミナ
ビ

の森、しのだの森、生田の森、うつきの森、きくたの森、いはせの森、たちぎきの森、常盤の森、くろつきの森、神奈備の森、うたゝねの森、浮田の森、うへつきの森、いはたの森、かうだての森、といふが耳とゞまるこそあやしけれ、森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを何につけたるぞ。こひの森、木幡の森。

○木幡—コハタ

○おほあらしの森 名所方角抄に、京とくらまとの中間、市原野といふ所に有之云々○しのびの森 抄に、河内國○こゝの森 名所方角抄によれば、伊豆の名所なり。○こがらしの森 駿河風土記に安井郡なる由みえたり。六帖に、人しれぬ思ひするがの國にこそ身をこがらしの森は有けれ○しのだの森 和泉○生田の森 攝津○うつきの森、きくたの森 未詳○いはせの森 八雲御抄に、大和○たちぎゝの森 未詳○常盤の森 八雲御抄に、山城○くろつきの森 未詳○神奈備の森 大和○うたゝねの森 未詳○浮田の森 萬葉十一に、かくしてや猶やな

りなむ大荒木の浮田の杜のしめならなくにとあり、契沖阿闍梨の説によれば、大和なり。前の大荒木の森とまぎらはし。後考をまつ。○うへつきの森 未詳○いはたの森 八雲御抄に、山城○かうだての森 山城にて、大和に近き所にや。蜻蛉日記初瀬詣の所にみえたり。○こひの森 名所方角抄に伊賀に懸湊あり。その事にや。○木幡の森 山城

百十段

○こし—森
○五月三日といふに
○はぎ—座
卯月の晦日に長谷寺にまうづとて、淀の渡といふものをせしかば、舟に車をかきすゑてゆくに、菖蒲こもなどの末みじかくみえしを、とらせたれば、いとながかりけり。こもつみたる舟のありきしこそいみじうをかしかりしか。高瀬の淀にとはこれをよみけるなめりとみえし。三日といふにかへるに、雨のいみじうふりしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきをきて、はぎいとたかきをのこわらはな

どのあるも、屏風のゑにいとよく似たり。

○淀 山城○末みじかく 末みじかくみゆるは、水中にある部分長ければなり。○高瀬の淀に 高瀬の淀は河内茨田郡なり。六帖に「こも枕たかせの淀にかかるものかるともわれはしらで頼まん」とある是なり。○はぎいとたかき 衣をあげて脛をあらはしたるをいふ。○屏風のゑ 拾遺夏詞書に「天曆御時、御屏風によどのわたりする人かける所」などあれば、此頃多くゑがけりとみゆ。

百十一段

湯は なゝくりの湯。有馬の湯。たまつくりの湯。

○なゝくりの湯 八雲御抄に「信濃」○有馬の湯 攝津なり。此湯の起原は、攝津風土記にみえたり。○たまつくりの湯 抄に「陸奥歎」

百十二段

常よりもことにきこゆるもの 殿上の車の音。春のには、とりの聲。曉のしはぶき。物の音はさらなり。

○殿上の 殿上にてきこをいふ。○物の音 管絃をいふ。是も曉が常よりことにきこゆるなり。

百十三段

ゑにかきておとるもの なでしこ。櫻。山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

百十四段

かきまさりするもの 松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじくさむき。夏はよにしらずあつき。

○かきまさりするもの、前段に譲りて書といふを省けり。

百十五段

あはれなるもの 孝ある人の子。鹿の音。よき男のわかきが、みたけさうじしたる。へだててゐてうちおこなひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人などの目

○孝一ケツ

○(むづましき人などを)へだててゐ

さましてきくらんとおもひやらる。まうづる程のありさま、いかならんとつゝしみたるに、たひらかにまうでつきたるこそいとめでたけれ。烏帽子のさまなどぞなほ人わろき。いみじき人ときこゆれど、こよなくやつれてまうづとこそはしりたるに、右衛門佐のぶかたは「あぢきなき事なり。たゞきよききぬをきてまうでんに、なでふ事かあらん」必よもあしくてよ」とみたけの給はじ」とて、三月晦日に紫のいとこきさしぬき、しろきあを、山吹のいみじくおどろくしきなどにて、隆光が主殿助なるは、青色のあを、紅のきぬ、すりもどろかしたるすゐかんはかまにて、うちつづきまうでたりけるに、かへる人も、まうづる人も、めづらしくあやしき事に、すべてこの山道に、かゝるすがたの人

○のぶかた―宣方

○あな―棟

○あな―棟

○すりもどろかし―摺辰

○あやしき事に―おしひて

○かはりに―宣方
 ○ついで―(にいひおく)

みえざりつとあさましがりしを、四月晦日にかへりて、六月十餘日の程に、筑前守のうせにしかはりになりにしこそげにいひけんいたがはずもときこえしか。これはあはれなる事にはあらねども、みたけのついでなり。

○みたけさうじ 御嵩に詣でて精進するなり、○へだてゐて 各自に室を異にして精進するをいふ。○ぬか 額づきにて、即禮拜なり。○むつまじき人 よき男の親族又は思ひ人など也。○きくらん 宸翰本此下に「心地いかならん」とあり。○おもひやる 他の人がなり。○ありさま 安否をいふ。○人わろき ミグルシキなり。是はやつれてなり。○のぶかた 尊卑分脈によれば、源重信公の子にて、従四位上左中将たり。○あぢきなき 抄に尋常の人のやつれ詣るは、あぢきなきとなり。○あしくてよ あしき衣きてまうでよとなり。○あを 源氏關屋にもみゆ狩衣なり。狩衣を狩襖といふも思ふべし。○山吹 衣の色なり。○隆光 尊卑分脈によれば、藤原宣孝の子にて、筑前、越前、備中、備前等の守となれり。○

すりもどろかし もちすりなり。春海の説に「もちすりはもちといふ詞は枕草子に山藍にてすりもどろかしたる水干はかま云々、狹衣に我心しどろもどろになりけり云々などあるもどろかしといへる事も、しどろもどろといへるも、みなもちれみだれたる意にて、おなじ詞なり」○するかんはかま 貞丈の説に「水干の事、仕立様、狩衣のごとし、袴は直垂のごとし云々、菊とちは總をおしひらめて、菊の花のごとし、平くして、一所に一つつ付る前に一所、後に四所付る、紐は九組の緒なり云々、前の紐はえりの上かどに付る、後の紐はえりの後の真中に付る也、前紐短く、後紐長し、又水干の袴も直垂のごとし、長袴なり云々」とあり、是は後世のなれど、猶推知すべし。○あやしき事に 堺本に此下に「いひあさみ」の五字あり。○かへりて 堺本に此上に「いとたひらかに」の七字あり。○げにいひけん 抄に「宣方があぢきなきとて、ぎよらにして、まうでし時の、いひけん詞にたがはずとなり」

九月晦日、十月朔日のほどに、只あるかなきかにきゝつけたるきりぐすの聲。鶏の子いだきてふしたる。秋ふかき

○目さましたる
(時)夜などすべ
(あはれなり)

○草—ムケラ

庭の淺茅に、露のいろく玉のやうにてひかりたる。かはたけの風にふかれたる。夕暮、曉に目さましたる。夜などもすべて、おもひかはしたるわかき人の中にせくかたありて、心にしもまかせぬ。山里の雪、男も女もきよげなるが、くろき衣きたる。二十六七日ばかりの曉に、物語して、あかしてみれば、あるかなきかに心ほそげなる月の、山のはちかくみえたるこそいとあはれなれ。秋の野、年うちすぐしたる僧たちのおこなひしたる。あれたる家に葎はひかゝり、蓬などたかくおひたる庭に、月のくまなくあかき。いとあらうはあらぬ風のふきたる。

○かはたけ 和名抄に苦竹をよめり。今のまだけなり。○夕暮、曉に云々 苦竹の風にふかるゝ音は、夕暮、曉、夜半すへであはれなりとなり。堺本

に「又かはたけの風にふかれたるおと、ゆふぐれもあかつきもよなかにもねさめてきゝたるにつけていとあはれなり」○せくかた 旁註に「親にても誰にても制しておもふまゝならぬなり」○心ほそげなる月 十六夜日記に「あけはなるゝうみづらをいと心ほそき月いでたり」とあるが如く、月の細きにみる人の心をよせていへるなり。○年うちすぐし 老いたるをいふ。

百十六段

正月寺にこもりたるは、いみじくさむく、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。雨などのふりぬべきけしきなるはいとわろし。初瀬などにまうでて、扇などするほどは、くればしのもとに、車ひきよせてたてるに、おびばかりしたるわかき法師ばらのあしだといふものをはきて、いさゝかつゝみもなくおりのぼり、何ともなき經のはしう、ちよみ、

○くればし―博階

○あしだ―履

○じゆ―頰

俱舎のじゆをすこしいひつゞけありくこそ所につけてをかしけれ。わがのほるをりはいとあやふくおほえて。かたはらによりて高欄おさへてゆくものを、たゞ板敷などのやうにおもひたるもをかし。

○初瀬 大和長谷寺なり。古本堺本には「きよみづ」とあり。○くればし くれは和名抄に博をよめり。内匠式に「楯博一材」又木工式に「楯博十六材」などあれば、木材をいふなるべし。くれははさまざまの木材をよせて造れるにや。空穂に「かくて樓にのぼり給ふべきほどのくれははしは、いろいろの木をませくにつくりて云々」とあり。○おびばかり 源臣の説に「源氏浮橋に、おびうちかけて云々、神佛のまへにして、かけおびといふものしたるとあれば、此説ならんか。下文におびうちかけて、をがみ奉るにと、清少みづからのさまをいへり。されど共に女の事也。こゝはいづれおびなれど法師のさまなり。○つゝみもなく さはりなき意なり。萬葉十三に恙無とかけり。○なにともなき 抄に「きゝなれぬ心なり」○俱舎

のじゆ 俱舎は具には阿毘達磨俱舎論といふ。世親菩薩の作なり。但し俱舎には論と頌とあり。○板敷などのやうに云々 法師のありきなれたるさまなり。

○御局して侍りはやつこもらせ給ふ

○ふかぐつ—深履
○はうくわ—半靴

○ないげ—内外
○わがき男ども(又)

○この数人にいとちかくさあゆみ(みより)

○さいだつ—先立
○しばし—待ちて

法師
御局して侍りはやといへば、沓どももてきておろす。きぬかへさまにひきかへしなどしたるもあり。もからきぬなどこと、くしくさうぞきたるもあり。ふかぐつ、はうくわなどはきて、廊のほどなどくつすりいるは、うちわたりめきて、又をかしのないげゆるされたるわかき男ども、家の子などあまたたちつゞきて、イヘノ子ナドそこもにはおるゝ所侍り、あがる所あり、などをしへゆく。何物にかあらん、いとちかくさしあゆみさいだつものなどを、イヘノ子ナドしばし。人のおはしますに、かくはせぬわざなり、イヘノ子ナドなどいふを、げにとて、すこしたち

○けそ—願證

○(信仰の)心もおこさる

○らいばん—禮盤

○ゆすりみち—動

おくるゝもあり、又きゝもいれず、我まづとく佛の御前にとゆくもあり。局にゆく程も、人のなみたる前をとほりゆけば、いとうたてけそ、うにおほゆるに、いぬふせぎの中をみいれたる心地、いみじくたふとく、なとて月比もまうですすぐしつらんとて、まづ心もおこさる。みあかしの常燈にはあらで、うちに又人のたてまつりたる、おそろしきまでもえたるに、佛のきらくくとみえ給へる、いみじくたふとげに、手ごとに文をさゝげて、らいばんにゐか、はりゐか、はりちかふも、さばかりゆすりみちて、これはととりはなちて、きゝわくべくもあらぬに、せめてしほりいだしたる聲々のさすがに、又まぎれず、干壇の御心ざしは、何がしの御ためとわづかにきこゆ。おびうちかけて、をがみたて

○ふたうー別當

まつるほどに「べたうさふらふ」といひて、櫛の枝ををりて、もてきたるもいとたふとくをかし。

○御局して侍り 御局を設けたり。早く籠り給へとなり。○沓ども云々 参籠せし人の沓どもを局へ持てくるなり。○きぬかへさまに云々 粗忽なる體をいふ。○もからきぬなど云々 装束と、のへたる體をいふ。○ふかぐつはうくわ 和名抄に「深頭履、今按此間云深履、其頭短者謂之半靴。」○ないげゆるされ 籠遇をうけなどして内外に立入るを許されたるなり。狭衣に「ないげもゆるし給へ。」○いとちかく云々 堺本に「しよりてあゆみまじりなどするを。」○いぬふせぎ 佛前に立つる埒也。雲圖抄季御讀經事といふ所に「四个日間不下格子、立犬防於橋間。」○手ごとにふみ 願文などをいふ。○らいばん 佛に禮拜し、もしは讀經する時すわる臺なり。○せめてしほりいだし、願文よむなり。○まざれす 次の「わづかにきこゆ」につけてみるべし。○千壇 抄に「布施の義なり。志の廣大なる千壇といふなり。布施は譯言なり。梵には壇波羅密と云なり。」

○(願意を佛に)いとよく申し

○はんざふー區
○いれて(あり)盥
の手しなきなど
(そへて)あり

○すぎやうー誦經

○(殊勝なる)心あらん

り○何がしの御ため 某事の御爲にとなり。さて千壇以下は願文の詞なり。

いぬふせぎのうちのかたより、法師より来て「いとよく申し侍りぬ。幾日ばかりこもらせ給ふべきにか。しかぐの人ももらせ給へり」などいひまきかせていぬる。すなはち火桶くだ物などもてきつゝかす。はんざふに手水などいれて。盥の手もなきなどあり。御供法師の人はかの坊に「などいひてよびもてゆけば、かはりぐぞゆく。すぎやうの鐘のおとわがなゝりときけば、たのもしくきこゆ。かたはらによろしき男の、いとしのびやかにぬかなどつく立居のほども、心あらんときこえたるが、いたくおもひりたるけしきにて、いもねずおこなふこそいとあはれなれ。うちやす

○かれ(の願)を

む程は、經たかくはきこえぬほどによみたるも、たふとげなり。たかくうちいでさせまほしきに、まして鼻などをけざやかにきくはあらで、すこししのびてかみたるは、何事をおもふらん。かれをかなへばやとこそおぼゆれ。日比こもりたるかひには、すこしのどやかにぞありし。

○しかくの人 堺本に此上に「このとなりには」の七字あり。○はんざふ 和名抄に「匣をよみ、説文を引きて、柄中有道、可以注水之器也」といへり。○盃の手もなき これをはんざふにそへたりとみたるは、堺本にてなきたらひなどくしておこせたりとあるによる。○御供の人は云々 抄に「局は狭ければ、一兩人は局に残りて、みなくは宿坊に居給へといひ渡す義なり」○わがなより わがためにするならんとなり。○いもねす 香川景樹の説に「寝入られずといふなり。くはしくいへば、いといふが寝入事にて、ねといふは臥靡く良なり」○鼻など云々 抄に「感涙などして鼻かむ義也」○かなへばや 成就せさせたしと也。○すこしのどや

かにぞありし 此は寺内の事になれて、さわがしき事も心に留めぬやうになれりとなり。

法師の坊に、をのこどもわらはべなどゆきて、つれづれなるに、只かたはらに、貝をいとたかく俄にふきいだしたるこそおどろかるれ。きよげなるたて文などもたせたる男の、すぎやうの物うちおきて、堂童子などよぶ聲、山びこひびきあひて、きらくしうきこゆ、鐘の聲ひびきまさりて、いづこならんときく程に、やんごとなき所の名うちいひて、御産たひらかになど、教化などしたる、すゝろにいかならんとおぼつかなく、ねんぜらるかし。これはたゞなるをりの事をめり。

○貝をいとたかく 序品に「吹大法螺」とあるを、科註に「答大衆心喜端」といへり。○たて文 是も願文なり。○すぎやうの物 抄に「布施物也」○堂

○すぎやう一編經
○きらくしう
灼燂

○たひらかになど
○祈り又それに
○おぼつかなく
(つ)

童子 海人藻芥に堂童子者五位ノ殿上人ノ所役也。布施ハ一人以下大臣公卿殿上人等取之。一人大臣等取給ヘル布施ヲバ自取之可渡從僧也。但如此事依時隨人事兼難定之間臨時可有故實事也。○山びこ 山間の反響也。○教化 法を説きて導くなり。譬喩品に轉無上法輪教化諸菩薩。○すゝろに 下のねんせらるに掛けてみるべし。○ねんせらる 傍人がなり。○これは云々 此句は上文を結ひて下文を起す也。

○まうづる(を)

正月などには、只いと物さわがしく、物望などする人の隙なくまうづるみる程に、おこなひもしやられず。日のうちくるゝにまうづるは、こもる人なめり。小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などのたかきいとよく進退し、疊などをうちおくとみれば、只扇にいでて犬ふせぎにすだれをさらくとうちかくる、いみじくしつけたるはやすげなり。そよ／＼とあまたおりて、おとなだちたる人のいや

○屏風などのたつき(を)

○あまたおりて(来たりその中)

○こゝや—後花

しからずしのびやかなるけはひにて、かへるにやあらん。その内あやふし。火の事せいせよなどいふもあり。七八ばかりなる男子のあいぎやうづきおごりたる聲にて、さふらひのをのこどもよびつけ、物などいひたるけはひもいとをかし。又三ばかりなるちごのねおびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし。乳母の名は、などいひいでたるもたれならんとし。らまほし。夜ひと夜いみじうの、じりおこなひあかすに、ねもいらざりつるを、ごやなどはて、すこしうちやすみたるねみゝに、その寺の佛の御經をいとあらくしうたかくうちいでてよみたるに、わざとたふとしともあらず。修行者だちたる法師のよむなめりと、ふとうちおどろかれて、あはれにきこゆ。又よるなどは

○ぐして(あり)
 ○ぬれうー園境
 ○(かゝる人は)顔
 しらぬは
 ○(女の)局ども
 ○(まる中にも)
 べたうなど
 ○いでぬる(もの)
 は)

顔しらで、人々しき人のおこなひたるが、青鈍のさしぬきのわたいりたる、しろききぬどもあまたきて、子どもなめりとみゆるわかきをのこのをかしげなる、さうぞきたるわらはなどぐして、さふらひのものどもあまたかしこまりぬえうしたるもをかしかりそめに屏風たててぬかなどすこしつくめり顔しらぬは誰ならんといとゆかししりたるはさなめりとみゆるもをかし。わかき人どもは、とかく局どもなどのわたりにさまよひて、佛の御かたに目もみいれ奉らずべたうなどよびてうちさゝめき物語していでぬる、えせものとはみえずかし。

○物望などする人 正月は除目などあるにより、立願の人多きにや。○小法師ばら云々 籠る人のために室内のしつらひする也。○進退しもちあつかふ事をいふ。○そよこよ 衣の音也。○かへるにやあらん

是は挿入の詞にて「げはひにてより、その内」とついでみるべし。○その内あやふし 火の要心に呼る聲なり。源氏夕顔に「火あやふし」とあるに同じ。○乳母の名云々 乳母の名、又は母を呼ぶにより、何人の籠れるかと、しらまほしくなるなり。○ごや 寅の刻なり。△二八一○その寺の佛の御經 春曙抄に「たとへば初瀬にては觀音經、うづまさにては藥師經のたぐひなり」○わざと 格別といふ意なり。□一八一○又よるなどは顔しらで やんことなき人にて、夜はこもらぬをいふ。顔しらぬとは逢ひたる事なきをいふ。塚本に「又よるなどはこもらで」とあり。○ぬえう かの入々しき人に隨行するさまなり、法華文句第三に「圍繞者行旋威儀也」とあり。○わかき人ども云々 抄に「又こもり人の中にわかき人の遊興するさまをいへり」○えせものとはみえず このえせものはフラチモノといふ意にて、寺にこもりて遊興するものにはあらずとなり。

二月晦日、三月朔日ころ、花ざかりにこもりたるもをかし。きよげなるをのこどもの櫻のあを、やなぎのあをなど、こ

ひあな一棟

〇くゝり括

のましげなるすがたにて、くゝりあげたるさしぬきのすそなど、もあてやかにぞみなさるゝ。つきくゝしきをのこに装束をかしろしたる餌袋いだかせて、ことねりわらはども紅梅、萌黄の狩衣に、色々のきぬ、すりもどろかしたる袴などきせて、花のえだをらせてもたせて、侍のほそやかなる二三人など具して、ごんぐうつこそをかしかしけれ。さぞかしとみゆる人あれど、いかでかはしらん。うちすぎていぬるも、さうぐゝしければ、氣色をみせましものを「などいふもをかし。」

〇ごんぐー金鼓

○やなぎ 面白裏青〇くゝり 野宮定基卿の説に「サシヌキノ袴ノスソニ穴ヲアケ緒ヲサシ通スナリ。狩衣ノ袖括ノ如シ是ヲ刺貫括ト云」とある。山貞丈雜記にみえたり。〇装束をかしろ 飾を面白くしたるをいふ。△三七〇餌袋 菓子飯などいふ、袋なり。もとは鷹の餌をいふ。

ものなれど、此頃はわりごと同じやうに用ふ。さるは空穂吹上にはたこ、すきはこ、わりご、ゑぶくろ、又樓の上にゑぶくろに御くだものいれたりなどあり。〇ごんぐ 桂川中良の桂林漫録に「佛堂ノ前ニ掛クル鰐口ノ事ヲ古クハ金鼓トモ云ケルニヤ」とて、京師壬生寺の鰐口の銘を擧げて證せり。〇さぞかしとみゆる云々 なたには某なりとみしれ、どなたにはこなたをしらぬとなり。〇氣色をみせまし 己がこゝにこもれる様子をしらせたらば、よかるべしとなり。

かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所につかふ人のかぎりしてあるは、かひなくこそおぼゆれ。猶おなじほどにて、ひとつ心にをかしき事も、さまぐゝいひあはせつべき人、一人二人必あらせまほし。そのある人の中にもくちをしからぬもあれども、目なれたるなるべし。男などもさおもふにこそあめれ。わざとたづねよびもてありくめるは。

〇(みれば)にや(り)か
ぎとたづね

○例ならぬ所 常に行かぬ所をいふ。○つかふ人云々 抄に「我扶持せる者計にて、友同行のなきは甲斐なきとなり。○そのある人 前の「つかふ人」とあるをさす。○目なれたる 目なれたる人のみにては興なしとなり。○をとこなども云々 女の方より推量していふ。○わざとたづね云々 男も同様に同行を求めなどするとなり。このは感歎のなり。○文の終に抄本、春曙本に「いみじ」の三字あり。活本、慶安本には「いみじく心つきな物」と次の題目につづけたり。古本も同じ。但くは「う」とあり。さればはにて終るべき處なり。さて次の「心づきなきもの」といふ段は三百五段と重複なれば、こゝは旁註本に従ひ省きつ。

百十七段

わびしげにみゆるもの 六七月の午未の時ばかりに、きたなげなる車にえせ牛かけてゆるがしゆくもの。雨ふらぬ日、はりむしろしたる車。ふる日はりむしろせぬも。年おいたるかたる、いとさむきをりもあつきにも。げす女のな

○つかふ人云々

○かうより冠
○うへのきね一袍

りあしきが子をおひたる。ちひさき板屋のくろりきたなげなるが、雨にぬれたる。雨のいたくふる日、ちひさき馬にのりて、前驅したる人の、かうぶりもひしげ、うへのきぬも、下襲もひとつになりたる。いかにわびしからんとみえたり。夏はされどよし。

○六七月の午未の時 正午より一二時間は暑氣殊に甚し。○はりむしろ 西宮記に、天祿四年十一月八日女御懷子於東河有除服、其儀御檝櫛毛車、其上張筵云々。○前驅 騎馬にて前供する也。○ひとつになりたる ぬるゝ事甚しければ、袍、下襲、一物となりてみゆとなり。

百十八段

あつげなるもの 隨身のをさの狩衣。のうの袈裟。であるの少將。いみじくこえたる人の、髪おほかる。きんの袋。六七月

○のう一納
○アホ一出居
○きん一琴

○すはう一修正

のすはうの阿闍梨、日中のときなどおこなふ。又おなじこ
ろのあかがねの鍛冶。

○隨身のをさ 抄に「近衛隨身の上臈を番長といふ。今隨身の長と云は、
此番長の事なり云々。襦の衣冠をさ、或は狩衣に花を著て服するなり」○
のうのけさ 法林装束抄に平袈裟、袈裟、甲袈裟とならべてしるし、そ
の袈裟の條に「甲も、綴も色々不同、又綾織物文等不同也。九條、敷かけ様
平けさにおなじき敷法服の時懸之云々」○での少將 禁中にて公事
ある時に、出居の坐につくなり。 参照 江次第七最勝講の條○阿闍梨
僧の職なり。○あかがね 抄に「六七月の酷暑なれば、銅にかぎらず、鐵
とても熱かるべけれど、とりわけ銅の名にちなみて熱義をいはん爲
なり」とあり。但し此題目のあつげのげの字に心をとゞむべし。

百十九段

○みそ一密

はづかしきもの 色このむ男の心のうちいさぎよきよ
ゐの僧。みそかぬす人の、さるべきくまにかくれゐてみる

○なと一は(この
女は)

らんをば誰かはしらん。くらきまぎれにふところ物ひ
きいるゝ人もあらんかし。それはおなじ心にをかしとや
おもふらん。よゐの僧はいとはづかしき物なり。わかき人
人あつまりゐて、人のうへをいひわらひせしりにくみも
するをつくづくとき、あつむる心のうちもはづかし、あ
なうたてがしがましなどおとなびたる人のけしきはみ
いふをきいれず、いひくつてのはては、うちとけてねぬ
る後もはづかし。をとこはうたておもふさまならず、もど
かしう心づきなき事ありとみれど、さしむかひたる人を
すかしたのむるこそはづかしけれ。ましてなさけあり、こ
のましう人にしられなどしたる人はおろかなりと、おも
はずべうももてなさずかし。心の内にもあらず、又皆

○(女に)おもはず

○(女が)わが事を
○(男の)かくかた
るなげ
○(男が)おもしろ
○(女が)おもしろ

これが事はかれにかたり、かれが事はこれにいひ、かたみにきかすべかめるを、わが事をばしらで、かくかたるをば「猶人よりはこよなきなめり」とや、おもふらん」とおもふこそはづかしけれ。いであはれ、又あはじとおもふ人にあへば、心もなきものなめりとみえて、はづかしくもあらぬものぞかし。いみじくあはれに心ぐるしげにみすてがたき事などをいさゝか何事ともおもはぬも、いかなる心ぞとこそはあさましけれ。さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮づかへ人などをかたらひて、たゞにもあらずなりたるありさまなどをもしらでやみぬるよ。

○色このむ男の心のうち、それに對する女が耻しきなり。次のよゐの

僧ぬす人も皆それに對して耻しきなり。次に「はづかし」とある皆同じ○よゐの僧 名目抄夜居の注に「護持僧候二間加持」又二間の註に「有觀音夜居僧加持所也(天台坐主寺長吏東寺長者)」○みるらん 盗人がなり。○それはおなじ心云々 盗人の目よりみてなり。○きゝあつむる 夜居の僧がなり。○あなうたて云々 おとなびたる人が、夜居の僧のきくに氣遣するなり。○うたておもふさまならず 男の心にこの女はかくあれかしとおもふさまにあらぬなり。さて此ならずは下に連ねて、ならずもどかしうと一氣によむべし。○さしむかひたる人云々 この人は女をいふ。すかしたのむるは男がなり。古本に「さしむかひたる程は、うちすかじておもはぬ事をもいひたのむる」とあり。○なさけあり云々 男をいふ。○もてなさす 男がなり。○心の内にのみもあらず 抄に「心中におもふのみならず、詞にいひあらはしなどするさがなきさまなり」○又皆これが事は云々 「これが事」かれが事とは、女の上をいふ。さて其大意は、わが事を、他の女にかれこれいひきかすとも心付かず、男のまのあたりかたる事のみきゝて、さてはおのれは他の女に勝れりと、男は思ひる

るならんとおのぼれにおもはるゝが、はづかしきなり。○あはじとおもふ人 男をいふ。○心もなきものなめり 抄にもとは心ありがほにみなさるれど、今はあはじとおもひうとむゆるに心なき人ぞとみえて、はづかしからぬとなり。○いみじくあはれに云々 女の上にあはれに心ぐるしき事のあるを、男の何ともおもはぬをいふ。○さすがに人のうへ云々 さる無情なる男がなり。○たのもしき人 親族などのたのみになるものをいふ。○たゞにもあらず 懷妊せしをいふ。

百二十段

むとくなるもの 潮干の湯なるおほきなる船、髪みじかき人のかづらとりおろして髪けづるほど、おほきなる木の風にふきたふされて根をさゝげてよこたはれふせる。相撲のまけているうしろで、えせもののずさかんがふる。翁のもとゞりはなちたる。人のめなどのすゞるなる物ゑ

○むとく—無徳

○もとゞり—翁
○め—妻

○(夫などは)必たづれさわがらんものなと(妻が)
○(夫などが)のどかに
○こまいぬ—狢犬
○し—種子

んじして、かくれたるを、必たづねさわがんものをとおもひたるに、さしもあらずのどかにもてなしたれば、さてもえ旅だちゐたらねば、心といできたる。こまいぬし、まふものの、おもしろがりはやりにてをどる足音。

○むとく 滋臣の説に「さまあしげにといふ意なり。○うしろで 後姿をいふ。○えせものの云々 事の是非を辨へず、おろかなる心に任せて、従者を叱責するをいふ。○もとゞりはなちたる 美隆の説に「もとゞりはなつとは鳥帽子をさぬをいふなり。著聞集に「鳥帽子をせでもとゞりはなちながら、門をあゆみ入けるを云々」○心といできたる 夫などの方よりよびに来たるにはあらで、わが心よりおもひかへしてかへるとなり。○こまいぬし、 楽曲の名なり。和名抄曲調類、啄木に、狢犬の名あり。撮壤集の遊樂の名に、獅子舞あり併せ考ふべし。○二五六○おもしろがりはやり おまり興に乗じて、舞ひいづるがむとくなるなり。

百二十一段

修法は 佛眼眞言などよみたてまつりたるなまめかし
うたふとし。

○佛眼眞言 佛母陀羅尼をいふ抄に佛眼亦佛母尊ト名ク一切諸佛菩薩ノ功德ヲ此一尊ニ惣ルナリ曼陀羅圖ニハ佛眼尊住中央佛菩薩諸天圍遶シ玉フナリ云々○此段を前段の終につゞけかけるは誤なり今は宸翰本により一段とす。

百二十二段

はしたなきもの こと人をよぶにわれかとしてさしいで
たるもの。まして物とらするをりはいとゞおのづから人
のうへなどうらいひそしりなどもしたるををさなき人
のきゝとりて、その人のある前にいひいでたる。あはれな
る事など、人のいひてうちなくに、げにいとあはれとはき
きながら、泪のふといでこぬ、いとはしたなし。泣顔つくり

○いとゞ(はした
なし)

○(泪の)ふといで
こぬ

けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事をきくに
は、又すゝるにたいいできにこそいでくれ。

○はしたなき 大秀の説に「上にもとゞかず、下にもつかず、中間にたゞ
よひたるやうの事を云り、故にまどひたる意、不都合なる事、たらはぬこ
と、俗にテモチブサタと云意、つきなきこと、よるべき事などに云り、又
「さてなしと云言は、意はなく、唯添たる言なり」○その人のある前、そ
しられし人の前にて、そのそしられたる事をいふは、わろしとも、子供の
しらすして、いひいづるなり。○けしきことに 常に變りたるさまをい
ふ。○いとかひなし 眞實の涙のいでこねばなり。

百二十三段

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御さじきのあなた
に、御輿をとゞめて、御せうそこ申させ給ひしなど、いみじ
くめでたく、さばかりの御ありさまにて、かしくまり申さ

○こぼる一零
○けさう一化粧

○あらはれ一洗

○たのぶ一齊信
○女院の御さじ
き二

せ給ふがよにしらずいみじきに誠にてほるばかりけさ
うしたる顔も皆あらはれて、いかにみぐるしかるらん。宣
旨の御使にて、たゞのぶの宰相中將の御さじきにまゐり
給ひしこそいとをかしうみえしか。たゞ隨身四人、いみじ
うさうぞきたる馬そひのほそりしたてたるばかりして、
二條の大路ひろうきよらにめでたきに馬をうちはやめ
て、いそぎまゐりて、すこしとほくよりおりて、そばのみす
のまへにさふらひ給ひしなどをかして御返しうけ給りて、
御輿のもとにて奏し給ひし程、いふもおろかなりや。さ
てうちわたらせ給ふをみ奉らせ給ふらん女院の御心、お
もひやりまゐらすは、とびたちぬべくこそおほえしか。
それにはながなきをして、わらはるゝぞかし。よろしきま

○女院の御返し
程の御有様

○御さじの
なうちわたらせ
給ふ
○女院の御心
をばいかに嬉しく思
召させ給ふらん
と

○こぼる一零
○けさう一化粧

ばの人だに、猶このよきはめてたきを、かうだにおもひま
ゐらするもかしこしや。

○八幡の行幸 奥に齊信の官を宰相中將と記せれば、長徳二年四月よ
り後の事なるべし。○女院 東三條院詮子を申す。天皇の御母也。○御輿
葱花籠を申す。○御せうそこ 抄に「一條院より女院への御せうそこ
なり。○さばかりの御ありさま 貴き御有様をいふ。○かしこまり 女
院を敬はせ給ふなり。○こぼる 白粉を零れおつるばかり厚くしたる
なり。○あらはれて 涙に洗ひ去らるゝにて、いたく感涙を流したる躰
也。○宣旨の御使 是即天皇よりのなり。○すこしとほくより云々 抄
に「女院の御棧敷のとほくよりおり、かしこまり申す意なり。○おもひや
り 少納言がなり。○よろしきまはの人 こゝはたゞ人の中にていふ。
○かうだに云々 女院がよき御子もたせ給ふなどおもひ奉るも、恐多
き事なりとなり。

百二十四段

〇らう殿

關白殿の黒戸よりいでさせ給ふとて、女房のらうにひまなくさふらふを細白あないみじのおもとだちや。翁をばいかにをこなりとわらひ給ふらんと、わけいでさせ給へば、戸口に人々の色々の袖口して、御簾をひきあげたるに、權大納言殿御くつとりてはかせ奉らせ給ふ、いともものくしうきよげによそほしげに、下襲のしりながく所せくてさふらひ給ふ。あなめでた。大納言ばかりに、くつとらせ給ふよとみゆ。山のゐの大納言そのつきく、さらぬ人々こきものをひきちらしたるやうに、藤壺のへいのもとより、登華殿の前までゐなみたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御はかしなどひきつくるひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿の清涼殿のまへにたゞせ給へれば、それ

〇はし殿

〇わらはせ給ふ
(大夫の勢さまで
もなき程だにかい
り)

はるさせ給ふまじきなめりとみる程に、すこしあゆみいでさせ給へば、ふとゐさせ給ひしこそ猶いかばかりの昔の御おこなひの程にかとみたてまつりけんいみじかりしか。中納言の君の忌の日とて、くすしがりおこなひ給ひしをたべ、そのずゞしばし。おこなひてめでたき身にならんとかとして、あつまりてわらへど、猶いどこそめでたけれ。御まへにきこしめして、佛になりたらんこそこれよりはまさらめとて、うちゑませ給へるに、又めでたくなりてぞみまゐらす。大夫殿のゐさせ給へるを、かへすゞきこゆれば、例のおもひ人とわらはせ給ふ。ましてこの後の御ありさまみたてまつらせ給はましかば、ことわりとおほしめされなまし。

○久須志伎
クヌシキ

○おもとたちや 女房をさしてのたまふなり。○翁 關白殿の自稱なり。○權大納言 伊周公なり。○つぎ 御弟をいふ。○さらぬ 御弟ならぬ人をいふ。○こきもの 濃き色なり。裝束をいふ。○いとほそやかに云々 關白殿のさまをいふ。○宮の大夫殿 道長公なり。公卿補任に據れば、道長公の中宮大夫を兼ねられしは、永祚二年十月五日なり。○あさせ給ふまじき 他人はともかくも道長公は踞蹠し給ふまじとなり。さるは道長公みづから高ぶりて給ひて、威勢ありければなり。○猶いかに云々 抄に「關白殿の宿世、いみじくおはす心をいふ成べし。○中納言の君 その人品考ふべし。□二一四、二五六○忌の日 籠中抄に、十齋日六齋日として、十齋日は一日、八日、十四日、十五日、十八日、廿三日、廿四日、廿八日、廿九日、卅日、小の月は廿七、八、九日」とあり。六齋日は八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、卅日、小の月は廿八、九日」とあり。又、齋月齋日といふはむねとは齋戒を持べきによりて齋とはいふなり。○くすし 雅澄は紫式部日記並にこゝの詞につきてくすみて實法なる意にて、古に云る久須志伎とは差異りたれど、これも本は此言の轉れるものなるべし」と

いへり。○たべそのすいしばし「そのすいしばし」たべとうちかへしてみるべし。○めでたき身 抄に「關白殿の目出度事をうらやみてかとの心なり。○これよりは 關白殿の御身上よりは」となり。○例のおもひ人 少納言の思ひ人となり。少納言は道隆公と道長公との御なからひあり。○しかりしをも思はず、道長公の方に交を結ひしを、儕輩より彼方に心をよせたりと讒しければ、かくは戯れさせ給ひしなるべし。道長公の方に交を給ひしは、大殿の上(倫子)のおこせ給ひし歌にても知るべく、儕輩に讒せられしは、百三十九段にても知るべし。但し、此時道長も踞蹠せしかと、御心地よくおぼしめさせ給ひしなるべけれど、御詞には出させ給はず、かゝる御詞にて戯れさせ給ふなり。○この後の御ありさま云々 春曙抄に「道長公の後々の御榮花を后宮御命にてみ給はゞとなり。○こ」とわり云々 同抄に「かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事を、后宮おぼしめしあはせば、我かく感じおもひし事は、ことわりと思召れんとなり」

百二十五段

○前栽—センザイ

○すいがい—透垣

○糸もたえさま
（になりたるに）

九月ばかりよ一よふりあかしたる雨のけさはやみて朝
日のはなやかにさしたるに、前栽の露こぼるばかりおき
わたりたるもいとをかす。すいがいらんもんなどのうへ
に、かけたる蜘蛛の巢のこぼれのこりて、所々に糸もたえ
さまに、雨のかゝりたるが、しろき玉をつらぬきたるやう
なるこそいみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬ
れば、萩などのいとおもげなりつるに、露のおつるに枝の
うちうごきて、人も手ふれぬに、ふとかみさまへあがりた
るいみじうをかすといひたることども、人の心にはつ
ゆをかすからじとおもふこそ又をかすけれ。

○前栽 庭前に植ゑたる草木なり。○らんもん 美隆の説に「瀾文亂文
などかきて、透垣などのやかやうの形したるをいふなり」とて、散木集連

歌部、大風にてたてじとみななどを吹たふしたるをみて、承源法師「大風に
たてじとみこそふしにけれ」つく庭はらんもんひしがたにしてとある
を引きて證せり。○萩などのヨリうごきてマデ 堺本に「萩などの枝の
をるばかりおもげなりつる露の、やうくおつるまゝにうちうごきつ
つ」○いみじうヨリつゆをかすからじマデ 堺本に「いとをかす、かくい
ひたることども、こと人の心にはさしもおぼえじ」

百二十六段

七日の若菜を、人の六日にもてさわぎとりちらしなどす
るに、みもしらぬ草を、子どものもてきたるを、何とかこれ
をばいふととへば、とみにもいはずいさなどこれかれみ
あはせて、みよな草となんいふといふものあれば、うべ
なりけり。きかぬ顔なるは、などわらふに、又をかすげなる
菊のおひたるをもてきたれば、

○みあはせて
（はどに）

つめどなほみ、なぐさこそつれなけれあまたしあれ
 ばさくもまじれり」といはまほしけれど、さくゝいるべくも
 あらず。

○いさ 美隆の説に「いさのさ文字すむべし、俗に「イヤサーコレハ何ト
 カ」とおほめく意なり」○いふものあれば かたへにかくいふものあ
 りしなるべし。○うへなりけり 濱臣の説に「耳無といふ草の名より、う
 べなりけり。さかぬかほなるはといへり」○つめどなほ云々 春曙抄に
 「草をつむに、人をつみおどろかす心をそへたり。つめどもさかぬかほに
 こたへぬは、つれなしあまたある中には聞といふ草もあるものをと
 り、菊をそへてなり」

清少納言枕草紙通釋上巻終

明治四十四年九月二十五日印刷
 明治四十四年九月二十八日發行

定價金壹圓

著者 石川縣金澤市杉浦町二十一番地
 武者 藤元

發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
 三浦

印刷者 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
 新井由藏

印刷所 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
 新井電新堂



東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所

有朋堂書店

電話本局千百三十六番
 振替貯金口座東京七一四八番

京都帝國大學教授 藤井乙男先生編

諺語大辭典

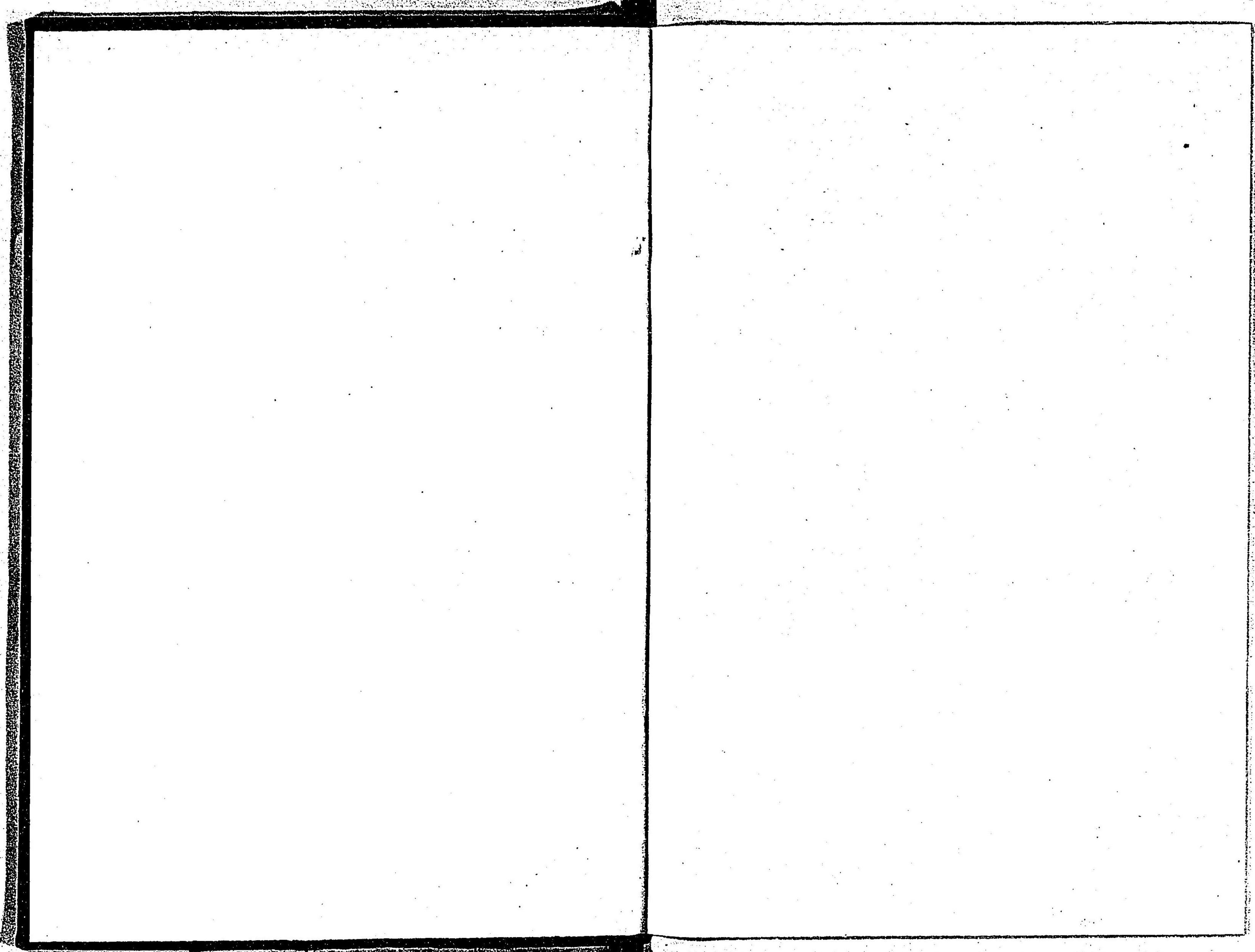
(全壹冊)

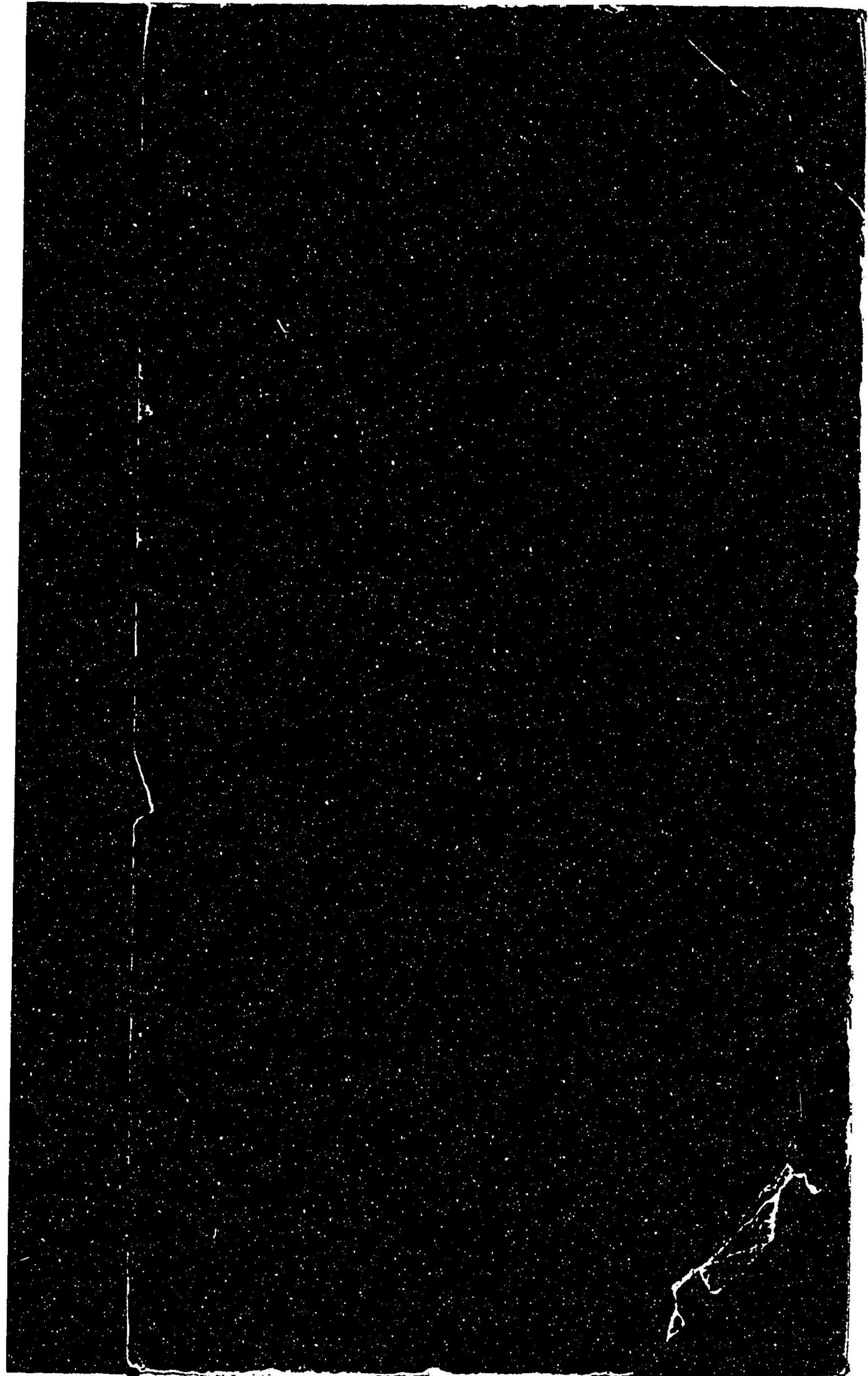
俚諺は一國民の知識、道德、經驗、機智、好尚が幾代の星霜を経て結晶したるものにして、吾人が祖先より繼承せる最大遺産なり。本書は編者が半生の心血を瀝きたる我邦に於ける空前の大諺語字典にして、文學上語學上貴重なる参考書たるのみならず、學校家庭の教育上に缺く可らざる一大經典也。

配列	五十音順
附録	分類索引
附版	脊皮角皮製
紙數	壹千四百頁
定價	金四圓五拾錢
小包送料	
内地	金拾六錢
臺灣	金四拾錢
清韓	金五拾錢

東京朝日新聞批評 此れ京都帝國大學講師藤井乙男氏が東京帝國大學卒業以後十三年間に於ける努力の發表也。氏の諺語を研究搜羅するや一意専心毫も他を顧みず屹々焉として鐵者の食を求むるより甚しく前後皆て他人の力を假る事なくして能く此の大著を成せり勢せりと謂ふべし。諺語は高く玄理を託かずして玄理自づから其中に寓し學者の思慮考案に出でずして偶然閑巻の俚夫俚婦の口に上りたるもの知らず識らざるの間に況く世に傳誦せられたるもの多し此點より見て諺語は人間の聲に非ずして神の聲也。故に諺語は教育家最も先づ研究せざるべからずして之に次では心理學者倫理學者社會學者宗教家哲學者詩人文人亦皆之を時代的に將て地方的に研究して大に發明する所あるべきこと百を行す。諺語辭典の搜集は和漢を通じて遠く歐米に及べり、今に行ふものは勿論にして溯りては數千年前の神話にまで及べり、其の解説は簡にして精、其の引用例は殆ど近世文學の範疇の有らむ限りを盡くせり、便條少ならざる好辭典と謂ふべし。

早稻田文學批評 本書は編者が十三年の苦心經營の結果に完成した我國最初の俚諺辭典であつて、單に俚諺ばかりでなく故事俗傳口謎や隱語異名の如きより現今普通に行はるる熟語成句の如きに至る迄細大漏らさず採集して一々簡明的確の說明を附し、引例は和漢洋より選んで比較参照の便に供してある。諺語は元來國民の天才知識經驗の結晶したものであつて寸鐵好く世道人情の機微を道破し日常生活に對しても聰明なる助言者なる事が多い、且一冊の修身書を用ふるよりも片言隻語の俚諺にして絶大の教訓を含むものが多しからして家庭學校には是非とも常備すべき寶典であらう、それに日本人は元來話下手である、話題に乏しい、此一冊の諺語辭典は何人にも共通な話題の提供者として珍重すべきものであらう。内容は千五百頁、編纂排列の方法も巧妙であるし、卷末の索引も最新にして便利である。單に辭典として見るも模範的と云つて可い、裝釘亦堅牢にして高雅、家庭書齋の裝飾品とするに足る。贈品賞品に用ひて亦最も妙。





095908-001-1

914.3-M993m

枕草紙通釈

武藤 元信/著

上

M44

DBR-0132



